平成15年度
三国･あわら丘陵地営農対策会議委託研究調査

坂井北部丘陵地における
グリーン･ツーリズム推進のための調査報告書

福井県立大学経済学部
浅沼　美忠

平成16年3月

はじめに

田畑、山、海が広がる農山漁村地域の長閑な風景やそこに住む人々の暮らし方は、いまや都会の人々にとってはそこに豊潤さを覚え、憧憬の想いを抱かせる。都会の生活からは決して発見することのできない風景、文化、伝統、生活に想いを寄せる人たちは、これまでのようなツアー旅行のような観光には飽きたらず、自然が広がり昔ながらの文化、生活が残る農山漁村地域に新しい観光を求めている。

一方、農山漁村地域では若者は都会に仕事と生活を求め、農林漁業従事者の高齢化と後継者不足の問題が深刻化している。その結果、遊休荒廃地は増加し、都会人が求める農山漁村地域及び農林水産業を持続させることが難しくなっている。

このような都市と農山漁村地域の間に生じているミスマッチを解消するのが、グリーン・ツーリズムであり、都市と農山漁村地域の交流によって共生を実現するものである。グリーン・ツーリズムの取り組みは、近年全国各地に浸透し始め、県レベルだけでなく市町村レベルでもグリーン・ツーリズム推進協議会が多数できている。

三国町、芦原町、金津町にまたがる坂井北部丘陵地においては、平成１５年度に策定された「農と文化のあるまちづくり」基本計画の中で施策の重点プロジェクトの１つとしてグリーン・ツーリズムを掲げたところである。一度丘陵地を訪れてもらえれば、広大な田畑が見せる眺望が都会人の「癒しの空間」となることを期待させるであろう。この土地はそうした潜在力を十分に備えたところであり、そこにどれだけの知恵と努力と熱意を注ぎ込むことができるかが潜在力を引き出す鍵になると思われる。

本調査を進めるに当たり、現地調査や文献調査などに基づいた課題整理や提言の取りまとめだけではなく、地域住民の努力と熱意をいかに引き出すか、その実践が重要であると考えた。実践はワークショップという形式で試行的に実施したが、非常に有益な意見が多数出てきたし、こうした取り組みの中から地域住民の熱意も生まれるのではないかと実感している。

最後に、先進事例調査ではヒアリング調査にご協力いただいた農家、行政担当者の方々、またアンケート調査にご協力いただいた「農と文化の体験コース」参加者の方々には、厚くお礼を申し上げる次第である。

また、先進事例調査とワークショップの実施では（財）日本総合研究所の小林由里子副主任研究員には多大なるご協力をいただいたことに感謝の意を表したい。そして、このような調査研究の機会を与えていただき、また多大なるご尽力までいただいた三国・芦原・金津丘陵地営農対策会議の事務局の方々には厚くお礼を申し上げたい。

平成１６年３月

福井県立大学経済学部
浅沼　美忠

目　　次

はじめに

序章 1
（１）調査目的 1
（２）調査方法と調査内容 1
（３）調査体制 2

１．グリーン・ツーリズムの概念と特徴 3
（１）グリーン・ツーリズムの定義と形態 3
（２）グリーン・ツーリズムの目的 7
（３）グリーン・ツーリズムの事例 9
（４）グリーン・ツーリズム推進の担い手 23

２．丘陵地におけるグリーン・ツーリズムの取り組み 26
（１）丘陵地におけるグリーン・ツーリズム振興の取り組み 26
（２）丘陵地におけるグリーン・ツーリズム・モデルコースの評価 27

３．住民参加型地域づくりとグリーン・ツーリズム 32
（１）ワークショップと進め方 32
（２）丘陵地におけるワークショップの実践と結果 34
（３）ワークショップを行ってみて（評価と課題） 40

４．丘陵地におけるグリーン・ツーリズム推進に向けての課題 41
（１）まちづくりの視点 41
（２）民間主導によるグリーン・ツーリズム推進のために 41
（３）地域ぐるみのグリーン・ツーリズム推進のために 42

【参考資料】
・「農と文化の体験」参加者アンケート調査の結果 46
・「農と文化の体験」小学生以下の参加者の感想文 51
・「農と文化の体験」参加者アンケート 55

序章

⑴ 調査目的

坂井北部丘陵地の年々減少している農業生産額や農業者、耕作地を農業生産対策のみで振興するのではなく、観光や商業など様々な地域資源と連携・融合させながら農業の持つ多面的機能を有効に活用することで、新たな事業の創出と地域の活性化を図ることが可能である。特に近年、国内外において多様化する観光ニーズに対応したグリーン・ツーリズムの取り組みが注目されており、農林水産業の振興と地域活性化に貢献している事例が多数見られる。

農業地域における地域活性化のためには、農業の生産的側面だけでなく、農業の多面的機能を活用し、農業の持つ潜在的可能性を効果的に引き出すことが必要であり、そのためには地域住民の様々なアイデアや発想、さらには熱意に基づいた取り組みが重要である。

本調査は、丘陵地全体を観光の対象と捉え、丘陵地の地域資源を有効に活用した地域活性化を図るために、グリーン・ツーリズムの先進事例等の現地調査等を行い、グリーン・ツーリズム推進のための今後の方向性を検討したものである。

また本調査を進めるに当たっては、「住民主体の地域づくり」を実現するために、住民のキャパシティ・ビルディング（能力の構築）を図ることを重視し、ワークショップの手法を活用し、ワークショップの実施プロセス、成果、問題点等を整理し、今後の住民参加型地域づくりのあり方についても検討した。

⑵ 調査方法と調査内容

１）先進事例調査

①調査実施先

・山村体験館「たかやす」（長野県大鹿村）
・するぎ農園村（長野県大鹿村）
・カントリーハットやまびこ館（長野県泰阜村）
・坊主山クライガルテン（長野県四賀村）
・飯山市グリーン・ツーリズム協議会（長野県飯山市）

②調査内容

・グリーン・ツーリズムの目的
・グリーン・ツーリズムの成功要因
・グリーン・ツーリズムの効果
・グリーン・ツーリズムの課題
など

２）アンケート調査

①調査対象者

・平成 15 年度「農と文化の体験コース」参加者

②調査項目

・評価（満足か不満か、もう１度参加したいかなど）

・良かった点（自然、体験内容、施設、料金、もてなし方など）

・不満点（自然、体験内容、施設、料金、もてなし方など）

など

３）ワークショップの実施

①ワークショップ参加者

・受け入れ体験農家

・行政の担当者

②ワークショップの内容

・受け入れ体験を行った感想

・地域の魅力

・地域の課題

・地域の課題解決の方法

・展開してみたいグリーン・ツーリズム

４）文献資料調査

・各種文献及び資料によりグリーン・ツーリズムの概念及び現状等の整理・分析

⑶ 調査体制

①調査担当者

浅沼　美忠　　福井県立大学経済学部講師

②調査協力者（先進事例調査及びワークショップ）

小林　由里子　財団法人日本総合研究所副主任研究員

1. グリーン･ツーリズムの概念と特徴

⑴ グリーン･ツーリズムの定義と形態

近年、農山漁村地域においてまちづくりや地域活性化策としてグリーン・ツーリズムに対する関心が高まり、従来の観光とは異なるグリーン・ツーリズムと呼ばれる新たな観光の形態が全国各地で展開されてきている。ところで、わが国でグリーン・ツーリズムという言葉が登場して 10 年以上たつが、グリーン・ツーリズムについての明確な定義が存在しないため、各地で展開されているグリーン・ツーリズムには様々な取り組みが含まれており、グリーン・ツーリズムの範囲も多様である。もともとヨーロッパで始まったグリーン・ツーリズムは、条件不利地域の農家が副業として取り組んだものであり、この範囲でグリーン・ツーリズムを捉えれば狭い概念となる。一方、産地直売所や農家レストランなどもグリーン・ツーリズムの範疇に含めて捉える例もある。これはグリーン・ツーリズムを「都市と農村との交流」を重視した広義の捉え方である。

１）グリーン・ツーリズムの定義

グリーン・ツーリズムは新しい観光形態の１つであると考えられる。まず観光とは何かについてみると、観光政策審議会による公的な定義によれば、「余暇時間の中で、日常生活圏を離れて行う様々な活動であって、触れ合い、学び、遊ぶということを目的とする」ものである。ここでは観光を規定する要素として３点を挙げることができる。すなわち、①時間的側面（余暇時間であること）、②空間的側面（非日常生活圏であること）、③目的的側面（交流すること）の３つである。

わが国で初めて本格的にグリーン・ツーリズムの考えが政策的に議論されるようになったのは、農林水産省のグリーン・ツーリズム研究会においてである。同研究会の中間とりまとめである「グリーン・ツーリズムの提唱―農山漁村で楽しむゆとりある休暇を―」（平成 4 年 7 月）では、グリーン・ツーリズムを「緑豊かな農山漁村地域において、その自然、文化、人々との交流を楽しむ、滞在型の余暇活動」と定義する。上記観光の定義と照らし合わせると、グリーン・ツーリズムは時間的側面、空間的側面、目的的側面の３点において観光の範疇に入ると考えることができる。また、観光の概念からグリーン・ツーリズムを特徴づけるとすれば、空間的側面においては自然豊かな農山漁村地域であること、また目的的側面においては農山漁村地域の自然、文化、人々との交流を楽しむということである。

現在、農林水産省のグリーン・ツーリズムに係る諸施策は、上記研究会の定義に基づいて実施されている。例えば、グリーン・ツーリズムの推進のために、平成 7 年に「農山漁村滞在型余暇活動のための基盤整備の促進に関する法律」が施行された。同法は、「主として都市の住民が余暇を利用して農山漁村に滞在しつつ行う農林漁業の体験その他農林漁業に対する理解を深めるための活動のための基盤の整備を促進し、もってゆとりのある国民生活の確保と農山漁村地域の振興に寄与することを目的とする」ものである。また、「農山

漁村滞在型余暇活動に資するための機能の整備を促進する措置」と「農林漁業体験民宿業の健全な発展を図るための措置」の２つを主な内容とする。後者は農林漁業体験民宿業の登録制度を設け、その健全な発展を図るための措置であり、グリーン・ツーリズムの代表的形態の１つを具体的に示している。一方、前者は都市住民等が農山漁村地域における滞在型余暇活動を促進するための機能の充実化を図る措置であり、様々な形態のグリーン・ツーリズムを内包しうる概念である。本報告書においては、こうした公的定義を踏まえ、グリーン・ツーリズムを都市と農山漁村の交流を図る農山漁村地域における滞在型余暇活動として捉え、多様な形態のグリーン・ツーリズムを対象範囲とする。

なお、都市と農山漁村との交流を通じたグリーン・ツーリズムの意義について、上記のグリーン・ツーリズム研究会では「都市と農村が相互に補完しあい、共生していくことにより、国土の均衡ある発展を目指すことを基本とし農村地域における開かれた美しいむらづくりに向けた意欲と、都市住民の側に芽生えた新たな形での余暇利用や農村空間への思いに橋を架けるもの」であることを強調している。

２）グリーン・ツーリズムの特徴

①地域の身の丈にあった規模のツーリズム

観光は戦後、大量高速交通機関の発達と国民の所得の向上に伴う観光の大衆化によってマス・ツーリズムとなり、競って規模の拡大を図り最大限の利潤を追求することが最優先されてきた。しかしながら、マス・ツーリズムの普及・拡大は大量の観光客を受け入れる観光地では大きな需要が創出され経済効果をもたらす一方で、景観や自然環境の破壊、文化の変容、犯罪の発生など様々な社会問題を同時にもたらした。マス・ツーリズムによって観光地経済が経済的豊かさを享受できる間はまだよいが、景気低迷や国際観光との競争激化などにより観光客数が減少する観光地では、肝心の地域経済は衰退してしまい、荒廃した自然環境だけが残るという悲惨な状況を招く結果となる。

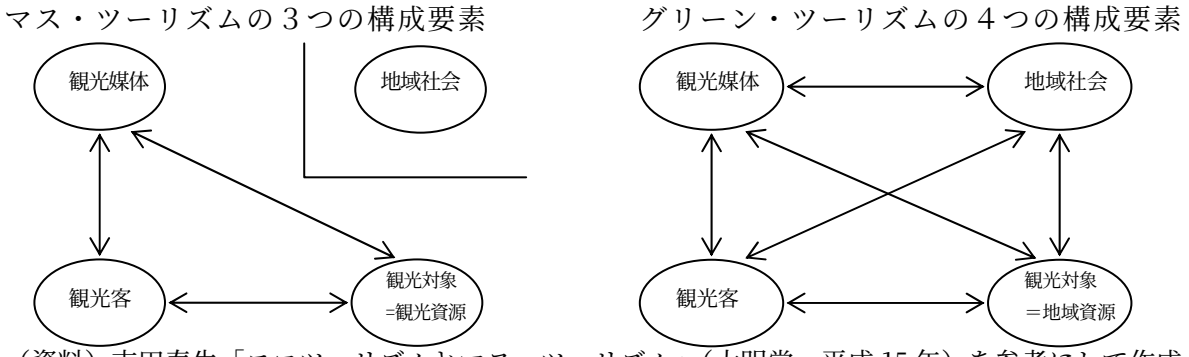
マス・ツーリズムは、大量の観光客を受け入れるだけの大規模な社会基盤や大型観光施設の整備が求められ、そのことが自然環境の破壊をもたらし、貴重な地域資源の喪失による地域ポテンシャルの弱体化を招くおそれがある。これに対して、グリーン・ツーリズムは地域の自然、文化、人々との触れあいが目的であり、これら地域資源の存在が最大限に重視され、それらの持続性を尊重することによって、地域ポテンシャルの向上を図ることができる。したがって、グリーン・ツーリズムでは現存する地域資源によって受け入れ可能な範囲内のツーリズムであり、地域の身の丈にあったスモール・ツーリズムであることが求められる。小規模のツーリズムであるが、そこから地域においてどれだけの経済的、社会的効果を期待することができるかを事前に見極めておくことが重要であり、グリーン・ツーリズムに取り組むに当たってはまず目的の明確化が必要である。また、当初の効果は微少であったとしても、波及効果を地域内に広げることによって、地域においては十分な効果を享受することも可能である。そのためには、グリーン・ツーリズムの目的の共有化を図り、地域内の様々な主体間の連携を強めることが求められる。

②地域主体の地域住民参加型のツーリズム

観光は一般的に、観光客、観光対象、観光媒体の３つの要素から構成される（図表 1- 1）。観光には、まず観光行為の主体である観光客がいる。次いで、観光客が訪問する目的である観光対象がある。観光対象とは、地域おける自然環境、施設、イベント、特産物等の観光資源を指す。さらに、観光には観光客と観光対象を結びつける観光媒体が必要不可欠である。観光媒体とは、具体的には移動、宿泊、手配、情報などを指すが、これら観光媒体がなければ、観光客は観光対象と結びつくことはできず、観光行為は成立しない。観光はこれらの３つの構成要素の組み合わせによってそれぞれの地域における産業として形成される。従来型の観光では、産業として成立することと地域経済が潤うことが重要であり、地域の観光のあり方を問う上で地域住民や地域社会はどちらかと言えば蚊帳の外に置かれていた。

グリーン・ツーリズムにおいて観光対象は重要である。グリーン・ツーリズムの定義でみたように、グリーン・ツーリズムの観光対象は、農山漁村の自然、文化、人々であり、それらは人為的に作られた観光施設などではなく、昔ながらの自然、生活、習慣、文化、人々の気質などが含まれ、観光資源というよりも地域資源と捉えるのが適切である。グリーン･ツーリズムは地域資源を有効に活用した観光であり､地域の個性が現れると同時に、その個性を魅力として売り物とするものである。こうした地域資源の有効活用を図る取り組みはまちづくりそのものであり、まちづくりと同様に個性的で魅力的なグリーン・ツーリズムを展開するためには、地域住民、ボランティア団体、企業等の地域社会の多様な主体の関与と参加が求められる。したがって、グリーン・ツーリズムは、マス・ツーリズムの３つの構成要素に地域社会が加えられ､４つの構成要素によって規定されることになる。特に、地域社会はグリーン・ツーリズムの重要な要素であり、観光客、観光媒体、地域資源の連係のあり方を地域社会が主体的に探求し、グリーン・ツーリズム推進の中核の存在となる。

図表 1- 1　ツーリズムの構成要素



（資料）吉田春生「エコツーリズムとマス・ツーリズム」（大明堂、平成 15 年）を参考にして作成。

フランスのグリーン・ツーリズムの推進者であるアンリ・グロロー氏（フランス・アグリツーリズム振興センター事務局長）は、グリーン・ツーリズムの５つの原則として以下の点を挙げている。

①地元の住民の意思で発していること
②地元の住民がコントロールし、改善や開発を行うこと
③地元で経営され、管理されていること
④地元の文化をベースにこれを生かし、発展させるものであること
⑤すべての社会的、経済的な利益の還元が地元に対して行われる構造であること

この捉え方は、まちづくりの発想からグリーン・ツーリズムを定義したものであると同時に、５つの原則はグリーン・ツーリズムがコミュニティ・ビジネスそのものであることを示している。ここでコミュニティ・ビジネスとは、この言葉の提唱者である細内信孝氏によれば、「地域コミュニティを元気にすることを目的とした地域密着型のスモール・ビジネスのことであり、地域住民が主体的に地域コミュニティの問題に取り組み、自分達が持っている経営資源を用いてビジネスの形態で解決していくこと」[1] である。すなわち、地域住民が主体的にコミュニティ・ビジネスとしてのグリーン・ツーリズムを展開することによって、農山漁村地域における高齢者問題、女性問題、後継者問題、遊休地問題、環境問題等々の諸問題に対する解決を図る途を切り開くことが期待されるのである。

３）グリーン・ツーリズムの形態

グリーン・ツーリズムの定義で見たように、グリーン・ツーリズムの範囲を概括的に捉えれば、都市住民と農山漁村との交流ということである。ところで、都市と農村との交流は様々な形態で取り組まれている。グリーン・ツーリズムが具体的にどのような形態で行われているかについては、まず日帰り型と宿泊型の２つのタイプに大きく分類することができる。

日帰り型は、日帰りを前提に気軽に農林漁業、農山漁村資源を体験できるメニューや施設である。日帰り型グリーン・ツーリズムの具体的形態の例として、

・農業体験（観光農園）・漁業体験・林業体験
・直売所（ファーマーズマーケット）
・農家レストラン
・オーナー制度

などがある。ファーマーズマーケットなどのように拠点施設の整備を必要する場合もあるが、日帰り型の場合、多くは農林漁業あるいは農山漁村のありのままの姿を都市住民に開放することによってグリーン・ツーリズムの展開が可能である。農林水産省農村振興局の調べでは、全国に平成 13 年度で農家レストランが約 500 店、女性や高齢者で運営されている農産物直売所が約 6,000 カ所ある。

一方、宿泊型のタイプは宿泊を前提とするため、当然ながら宿泊施設の整備が求められる。また、グリーン・ツーリズムでは農家が自宅の一部の部屋や施設を都市住民等の宿泊のために活用するということもある。宿泊型グリーン・ツーリズムの具体的形態の例とし

[1]細内信孝、木村政希「コミュニティ・ビジネスによる雇用創出策～地域雇用の新展開と自治体の政策～」（「地方財務」2000 年 7 月号）

て、

・クラインガルテン（市民農園）

・農家民泊（ファーム・イン）

・体験型宿泊

などがある。クラインガルテンとは、簡易宿泊施設付き市民農園を意味し、わが国では兵庫県八千代町の「フロイデン八千代」、長野県四賀村の「坊主山クラインガルテン」などがある。農林水産省農村振興局の調べでは、クラインガルテンは平成 13 年度で全国に 2,610 施設あり、総区画数は 14 万区画ある。農家民泊とは、農家に実際に宿泊しながら農業体験をすることである。平成 13 年度で全国に約 5,000 軒の農家が農家民泊に取り組んでいる。体験型宿泊は、旅館やホテルなどの宿泊施設に宿泊しながら地元の農家等と交流しながら農業体験を楽しむ活動である。

グリーン・ツーリズムを「都市と農村との交流」という広い捉え方をすれば、具体的形態はより多様であるかもしれないが、わが国で現在進められているグリーン・ツーリズムは概ね上記のようなものであると考えられる。

(2) グリーン･ツーリズムの目的

グリーン・ツーリズムへの関心が高まるとともに、全国各地でグリーン・ツーリズムの取り組みが実際に始まり、また多くの自治体で施策としてグリーン・ツーリズムの推進を検討しているが、その地域で何のためにグリーン・ツーリズムに取り組むのかという目的に関しては、グリーン・ツーリズムの定義と同様に一様ではない。特に、グリーン・ツーリズムの目的が何であるかを明確にすることは、グリーン・ツーリズムの推進を図る場合には重要である。第１に、目的を共有化することで地域一丸となってグリーン・ツーリズムを推進していく地域のパワーとなるからである。第２に、目的の明確化によって地域全体で何をしようとしているかが明らかになると同時に、その実現のために地域の各主体がどのような役割と責任を果たすべきかがはっきりするからである。

本報告書では、グリーン・ツーリズムを目的別に７つのタイプに分類・整理した。すなわち、①交流促進型グリーン・ツーリズム、②副業型グリーン・ツーリズム、③産業創出型グリーン・ツーリズム、④高付加価値型グリーン・ツーリズム、⑤地域資源活用型グリーン・ツーリズム、⑥景観保全・文化保存型グリーン・ツーリズム、⑦地域宣伝型グリーン・ツーリズムの７タイプである。ただし、実際のグリーン・ツーリズムは必ずしもどれか１つの目的のためだけに実施されるわけではなくて、ほとんどの場合は目的が融合しあい複合的な目的を有しながら行われているといえる。また、複合的な目的の中でも各目的の重要度には濃淡があり、地域の特性、諸事情が反映されている。

① 交流促進のためのグリーン・ツーリズム（交流促進型グリーン・ツーリズム）

都市との交流の促進を図ることを目的としたグリーン・ツーリズムである。農的生活を体験したいという都会人のニーズの受け皿になると同時に、都市の人たちと交流をし

たいという地域住民のニーズにも応えるものである。都市と農山漁村との交流促進は、グリーン・ツーリズムの定義そのものであり、すべてのグリーン・ツーリズムにも共通した目的であるといえる。グリーン・ツーリズムにおいては、単なる交流人口の拡大を通じて地域活性化を目指す従来型の観光とは異なるものであり、都市と農山漁村の両者のニーズの合致から生まれたものであることを認識しておく必要がある。

② 副業としてのグリーン・ツーリズム（副業型グリーン・ツーリズム）

農家の主収入の増加というよりも、農家の副収入として、いわば主婦や高齢者のお小遣い稼ぎ程度に行われるグリーン・ツーリズムである。個々の農家における主婦あるいは高齢者が小遣い稼ぎで始めたものであっても、リピーターが増え安定的な収入になっていくと、地域内で同じようなことをやってみようという広がりが出てくる。後述する長野県大鹿町などはその例であり、農家民宿「たかやす」の成功から農家民宿の集積が生まれている。

③ 産業（新規産業・雇用の創出）としてのグリーン・ツーリズム（産業創出型グリーン・ツーリズム）

②とは異なり、地域の所得・雇用の拡大のために、新規産業として展開するグリーン・ツーリズムである。観光客の多様なニーズに対応して、これまでのマス・ツーリズムとは異なる新たな形態の観光を産業として展開しようとするものである。また、従来のような行政主導の産業政策と異なり、地域住民と行政等との連携による地域政策的産業政策であることが求められる。

④ 販売拡大・高付加価値化のためのグリーン・ツーリズム（高付加価値型グリーン・ツーリズム）

レストラン、農家、民宿などが売上高の拡大を図ることを目的として行われるグリーン・ツーリズムである。農業も従来のような農作物を販売するだけで終わるのではなく、加工品の製造・販売にも力を入れることで農業の高付加価値化を図ることも含まれる。

⑤ 未利用地域資源有効活用のためのグリーン・ツーリズム（地域資源活用型グリーン・ツーリズム）

遊休地や遊休施設、あるいは未労働の主婦や高齢者など、未利用の地域資源の有効活用を図ることを目的としたグリーン・ツーリズムである。農山漁村地域には豊かな自然環境や景観だけでなく、都市にはない文化、伝統、生活の営みなどがある。グリーン・ツーリズムではこれらが重要な観光対象であり、付加価値を創出する地域資源となる。また、温泉地などの従来型の観光地では、景気低迷や価値観・ライフスタイルの変化などから観光客が減少し、厳しい経営を迫られている旅館・ホテルも数多く存在する。こうした旅館・ホテル等の宿泊施設も地域ぐるみのグリーン・ツーリズムに取り組むことで有効活用を実現することができる。特に、宿泊型のグリーン・ツーリズムの推進を図

る場合には、旅館・ホテル・民宿等の参加は重要である。

⑥ 自然環境・景観の保全と文化保存のためのグリーン・ツーリズム（景観保全・文化保存型グリーン・ツーリズム）

地域の自然環境や景観あるいは地域の伝統文化等を守ることを目的としたグリーン・ツーリズムである。従来のマス・ツーリズムは規模の拡大を重視し利便性と経済性を追求してきたが、反面では地域住民の居住環境の悪化、伝統文化の変質、あるいは生態系の破壊などを招き、地域に悪影響を及ぼし、むしろ観光地としての魅力を損ない、地域経済・産業の衰退という結果がもたらされてきた。グリーン・ツーリズムを地域の持続性、地域住民の快適な居住環境を守るという視点から展開するものである。

⑦ 広告としてのグリーン・ツーリズム（地域宣伝型グリーン・ツーリズム）

地域の知名度あるいは地域イメージの向上を図るために、地域の宣伝・PR を目的としたグリーン・ツーリズムである。すべての形態のグリーン・ツーリズムが地域宣伝型グリーン・ツーリズムとなりうる。グリーン・ツーリズムを地域宣伝のために有効に活用するということを地域の共通目標として展開される。

(3) グリーン･ツーリズムの事例

ここでは、グリーン・ツーリズムの５つの事例を取り上げる（図表 1- 2)。事例１の「山村体験館たかやす」は農家の主婦が副業として展開したグリーン・ツーリズムである。事例２の「するぎ農園村」は遊休荒廃農地を地域ぐるみで有効活用を図ろうとした取り組みである。事例３の「カントリーハットやまびこ館」は、交流の拠点として整備された施設であり、特に都会の小中学校生が地域の自然等に触れる機会を作ろうとした取り組みである。事例４の「坊主山クラインガルテン」は事例２と同様に遊休荒廃農地の有効活用を図ろうとする取り組みであり、事業の成功は結果として視察団が多数訪れるなど地域のＰＲにも貢献している。最後の事例５は行政主導による地域ぐるみのグリーン・ツーリズムの取り組みであるが、行政による交流拠点施設、体験施設の建設・運営だけでなく、地域ぐるみで体験メニューの企画、実施に取り組んでいる。

以下では、各事例について現地での調査結果に基づいて詳細に紹介する。

図表 1- 2　グリーン・ツーリズムの目的と事例

目　　的	事　　例
①交流促進型グリーン・ツーリズム	事例３　長野県泰阜村　「カントリーハットやまびこ館」
②副業型グリーン・ツーリズム	事例１　長野県大鹿村　山村体験館「たかやす」
③産業創出型グリーン・ツーリズム	事例５　長野県飯山市　飯山市グリーン・ツーリズム協議会
④高付加価値型グリーン・ツーリズム	事例５　長野県飯山市　飯山市グリーン・ツーリズム協議会
⑤地域資源活用型グリーン・ツーリズム	事例２　長野県大鹿村　「するぎ農園村」 事例４　長野県四賀村　坊主山クラインガルテン
⑥景観保全・文化保存型グリーン・ツーリズム	事例５　長野県飯山市　飯山市グリーン・ツーリズム協議会
⑦地域宣伝型グリーン・ツーリズム	事例４　長野県四賀村　坊主山クラインガルテン

事例１　長野県大鹿村　山村体験館「たかやす」

１）所在地

長野県下伊那郡大鹿村鹿塩 3-747

人口約 1,500 人

２）経緯

平成元年、村制 100 周年を記念した都市と農村の交流事業が行われた。都会の母親を村に呼び、山村のありのままの生活を短期間体験してもらうことを目的とした「お母さんの山村留学事業」である。やがて参加している都会の人たちから、来たい時に何時でも泊まれる所が欲しいという声があがり、平成３年からは年４回の山村民泊となり、体験から交流にこの事業の目的が拡大されていった。この事業は８年間続いた。

この事業の企画から関わり、山村留学の実行委員長も兼ねてきた伊東和美氏は、姑が病気で倒れたこともあり、平成３年に役場を早期退職し、自分の農家の納屋を改造し翌平成４年、「山村体験館たかやす」を開業した。

伊東氏の自宅には、山林 45ha、水田と畑がそれぞれ 50ａあり、経済面では農業と林業の基盤があった。宿泊場として、納屋の改造費に 200 万円をかけただで、調度品は土蔵に埋もれていた道具を利用して賄った。囲炉裏は日本の文化であり、火は人の心を癒す効果があるということから、改造の際、特に囲炉裏にこだわった。

山村留学の事業は平成８年の夏、保健所の指導がありひとまず終了したが、平成９年からは事業に参加した数件の民泊家庭で民泊組合を発足させ、民間主体の交流事業に取り組むことになった。

３）内容と利用状況

「たかやす」では大がかりな施設やマニュアル化した体験メニューを用意していない。

村全体を体験してもらうことを基本に、ありのままの自然、農業、農産物、料理などを訪れた客に提供するとともに、歴史や文化などの村の資源に触れてもらうことを売りものにしている。利用者はほとんどが自炊で、ここならではの新鮮でおいしい野菜や果物を自由に収穫できるようにしており、好評を得ている。原則１日１組だけを受け入れるようにしている。宿泊料金は、自炊は１泊 3000 円、２食付きで 5000 円である。

「たかやす」を運営していく上でモットーとしていることは以下の通りである。

○村を元気にしたいなら、村人の意識を変えること。意識を変えるには交流をすること、交流をもっと進めるにはお母さん達が動くこと。

○一番は自分の家庭を重視すること。家族の理解を得ること。自分の生活の基盤があってこそできること。

○借金はしない。無理はしない。負担にならない。心のゆとりを持っていること。そして、好奇心を持っていること。

○自然に咲く素朴な野の花でもてなし。訪れた人びとに元気をとり戻してもらえる癒しの場所となること。野の花のようなさりげない気持ちでいれば心が通じ合う。

○グリーン・ツーリズムとは考えていないから、マニュアルもない。来た人が自分の発想で自由に使える場を提供するだけ。

○地域の特徴、魅力を見つける。地域の資源を活かすこと。そのためには、「（もうけようとせず）ここで自分が楽しく暮らせる方法はないかな」と考えること。それがメニューにつながる。

○グリーン・ツーリズムの効果は、ここに住んでいる人が生き生きしてくること。

○スターにならないこと。地域全体のバランスを考えて、連携しながら進めること。

「たかやす」を訪れる客には、子供連れの家族やグループが多い。「たかやす」をベースに周辺の川原や森での散策、使われていない牛舎などに手づくりのテントで寝たり、竹をつかった流しソーメン、ドラム缶の風呂づくり、川に流水プールをつくるなど、訪れた人が自由な発想で楽しんでいる。「場所を提供していただき、自由に使わせてもらえる」のが魅力であり、リピーターがたいへん多い。

リピーターの多くが「たかやす」を、そして大鹿村を第二のふるさとにしている。不足している物を持ち寄ったりして、まるで別荘か実家に戻ったような過ごし方をしている。

４）課題、今後の方向性

今後は、大鹿村全体の観光施設との連携をめざしている。特に旅館との連携により、多様なメニューを展開していきたいという方針である。

５）評価

きっかけは行政主導で立ち上げたが、企画・運営面で受け入れ農家が積極的に関わり、行政の事業が終了した後も、民間主導で継続させている点が大いに評価できる。

農家へ運営主体がスムースに移行できたのは、受け入れ農家の家族の理解と協力、関係

スタッフのチームワークの良さ、無理をしないでむしろ自分も楽しんで取り組んだことがあげられる。

そして、何よりも大きな要因は、「たかやす」の女将さんのリーダーシップと人間性、客に気づかれないような細やかな配慮があることなどである。リピーターが多いのも、たかやすの女将さんのパーソナリティに寄与するところが大きい。グリーン・ツーリズムを推進する上で、キーパーソンの存在はきわめて大きいといえる。

事例２　長野県大鹿村　「するぎ農園村」

１）所在地

長野県下伊那郡大鹿村大河原 354

人口約 1,500 人

大鹿村は県外からの流入者が多い。大鹿村には移住の２つの波がある。第１期は昭和 50～60 年にかけて、有機農業をやりたいという県外者が移住してきた時期があった。現在でも無農薬で有機農業を続けている。第２期は平成 10～12 年で、公共事業の増加に伴い民間建設会社が進出してきて、ＵＩターンで入ってきた。20 家族が移住し、現在でも 10 家族が住んでいる。最近では、定年退職して大鹿村で田舎暮らしをしたいという人たちが来ている。

２）経緯

大鹿村は 30 年も前から高齢化率が高く（高齢化率 45%）、過疎化が深刻化していた。また農業従事者の高齢化、後継者不足、兼業化などが進み、農業の経営規模も縮小の傾向にあり、遊休荒廃化農地が増加していた。

このような時、地域住民の話し合いの中から、するぎ地区約２ha を活用しながら地域住民がお互いに協力して農業等を行っていく手段はないかと意見が出され、検討を重ねてきた。一方、大鹿村でも大鹿村総合振興計画・基本構想に位置づけられていた遊休荒廃化農地の活用策及び交流事業推進策に取り組んでいた。

遊休荒廃化農地の有効活用を推進するために、都市と農村の交流事業に取り組むことになった。具体的には農作業体験及び山村生活の体験を行うことができ、さらには地域住民の憩える場として、体験農園・体験館を一体的に整備し、相互の交流を深め、農業振興と地域の活性化を図る場として「するぎ農園村」が設置された。

＜取り組みの経緯＞

平成４年度　地域から要望（するぎ地区の活用及び都市住民との交流事業について）

平成５年度　村では基本計画を策定し、地区での懇談会を実施

平成６年度　大鹿村中峰地区活性化推進委員会（構成は村議会、農業委員会、農協、自治会代表、地権者、村）を設置し、基本計画の見直し

中山間地集落機能強化等促進事業開始
するぎ農園村管理運営委員会を設置（構成員は自治会員 30 人と役員 3 人）
農園村の運営等の検討及び先進地視察
平成７年度　するぎ交流体験館オープン（イベント、予約による郷土料理の提供）
農園村での作付開始
平成８年度　中山間地集落機能強化等促進事業完了
平成９年度　するぎ交流体験館　通年営業開始（定休日月・火曜日）
平成 14 年度　するぎ交流体験館閉館

３）内容と利用状況

平成７年度のオープンから７年で閉館となってしまった。開始当初は賑わいがあったが、年々利用者は減り、住民による管理運営を維持することが困難となったことによる。

このような状況に陥ることになった理由として考えられるのは、以下の通りである。

・運営委員会のメンバーがほとんど自治会役員で構成されたために、企画力に欠けていたこと。
・スタッフとして主婦を時間給で雇ったため、意欲を十分に引き出せなかったこと。意欲のある人なら誰でも参加し、頑張っただけ報酬が得られるという形にした方が良かった。
・しかも、スタッフとなった主婦たちが 10 年間ずっと関わり高齢化したこと。動ける人がいつでも参加できるような仕組みにした方が良かった。
・開館した当時は客も多く、郷土料理の予約がなかなかとれない状態だった。そのことが「いつも利用できない」という印象を与えてしまい、その後、新規の予約がとぎれてしまったこと。
・平成７年の頃は体験交流の場が少なかったが、その後他の地域でも取り組むようになり、「するぎ農園村」までわざわざ来る必要性がなくなってしまった。さらには、また来たいという魅力に欠けていたため、一度来た人は他のイベントに行ってしまったこと。リピーターをいかに確保するかは、体験イベントにとって重要な課題である。村内の観光施設などとの連携をとらなかったため、地域全体に広がらなかったこと。

一方、本事業に取り組んで良かったことは、手作りの郷土料理が好評だったこと。個人の遊休農地を利用したので、畑が荒れずにすんだことなどである。

４）課題、今後の方向性

「するぎ農園村」は平成 14 年に閉鎖したが、その後、他地域からの転入者（30 歳代の夫婦）が体験施設の運営管理をしたいと申し出てきた。彼らは田舎暮らし志向である。村としては、外部の人に任せられるか、という意見もあった。そこで村民に体験施設の運営希望者を募ったが、結局、誰も応募はなかった。そこで彼らに任せることにした。平成 16 年 4 月、オープンの予定である。

再開にあたり、前回の失敗から地域全体で取り組むことが必要であると考えている。す

るぎ地区だけでなく、周辺の地域住民も巻き込んで取り組むことを重視し、計画も共有化し、単に施設を利用してもらうだけでなく、地域住民みんなが関わるような工夫を考えている。

新しい「するぎ農園村」の特徴は、以下の通りである。

・当該地域を農業特区とし、誰でも運営に参加できるようにする。３年間は無料で施設を提供する。
・観光協会と話し合いながら、大鹿村全体の取り組みとして、「たかやす」のような農家民宿や旅館とも連携する。
・若い世代の人にも受けるようなメニューを考える。例えば、パン焼き、ブルベリー農園など。
・基本的には経営を任せた夫婦が中心であるが、村人も協力し、村は彼らのアイディアを支援する。
・現在ある資源を活用する。

５）評価

「するぎ農園村」の周辺でも村民主体の新しい動きがある。上蔵（わぞう）という地区は、高齢化率が 45%で高齢のために農業ができない農家が増えている。村民有志によって豪農の空き家を利用して、畑の中の「休憩所＋宅老所」を作ることにしている。そこで高齢者の介護をしながら農作業をすることで高齢者対策と農業対策になる。また直売所を設けることによって、地域住民との交流の場にもなる。このように地域住民が自主的に動き始めたのも、「するぎ農園村」の取り組みが刺激になっているといえる。

「するぎ農園村」の取り組みから、村としても交流の重要さを再確認した。「交流は地域を元気にする。いろいろな人が来てくれれば、波及効果も期待できる。人を呼ぶために、村をきれいにしようとする。地域住民が自分たちで環境を整備するようになる。自分たちの小遣いも稼げるようになる。」という意識が芽生えた。

村としては、いまからクラインガルテンに取り組むことはできないので、観光農園を中心にした事業を行う予定である。また、特区にすることで公共事業が減少している建設業者が農業に参入できるようにする方向である。

大鹿村の取り組みは、初期の段階から地域住民への説明と理解を求めることがグリーン・ツーリズムの推進のために重要なポイントとなることを示している。

事例３　長野県泰阜村　「カントリーハットやまびこ館」

１）所在地

長野県下伊那郡泰阜村 6172-1

人口約 2,220 人

２）経緯

平成 11 年　村の地域交流の拠点として、また学生や企業の研修施設として設立した（費用 2.8 億円）。

企画運営は、村民有志で構成された体験実行員会が行う。

３）内容と利用状況

平成 12 年に村の職員や村会議員などで泰阜村グリーン・ツーリズム研究会を立ち上げ、小城頭登山、万古川沢歩き、万古渓谷登り、やすおか子ども体験村、紅葉泰阜ウオーキングなどの体験メニューを企画し運営している。

泰阜森林塾きこり学校では、林業（山の手入れや間伐の仕方、道具の手入れの仕方等）について楽しく学べる場を設けている（10 泊 11 日）。年 2 回行っており、平成 15 年で 6 回目である。参加費は 10 万円。15 人を定員としているが、参加者は 10 人くらいである。10 人以上になると移送の車の確保が大変であり、また 10 人程度の方がじっくりできるので、規模としては適当と考えているようである。

また、グリーンウッドというＮＰＯが 13 泊 14 日の体験事業を文部科学省の指導で行っていたが、平成 11 年からやまびこ館で村と合同で行うようになった。

利用者は、平成 13 年は宿泊が 1,993 人、研修が 7,734 人、平成 14 年は宿泊が 1,800 人、研修が 6,000 人といずれも減少している。

やまびこ館は、地域住民の会合の場、公民館的使われ方になっており、ここで葬式なども行われている。

４）課題、今後の方向性

村としてはきこり学校を中心に都市と農村の交流体験事業を展開していく方向であるが、特にグリーン・ツーリズムとしては考えていない。しかし、イベントなどは新聞の記事に載るので、参加者はＰＲしなくても集まる（主に県内）。

村の施設なので、予算が関係するため、企画がたてにくい。柔軟な取り組みができないという課題がある。

交流体験等を行うとき村の人にも手伝って欲しいが、みな仕事を持っているので、継続して手伝ってもらうことが難しいという問題がある。

泰阜村としては、グリーン・ツーリズムに特に力を入れているわけではないが、グリーン・ツーリズムを行うには民宿が中心になって行うのが望ましい。やまびこ館でグリーン・ツーリズムを行うには、地元の人の協力が必要である。しかし、この地域は大部分が兼業農家であるので、平日の日中は関わることができない。またグリーン・ツーリズムに取り組むには、テーマのあるものが良い。例えば、民宿客開拓のためのグリーン・ツーリズム、農業＋農家民泊のグリーン・ツーリズムなどが考えられる。

今後の課題は、やまびこ館を行政が主体となって運営していくのは難しいので、民間主導にどのように繋げていくかである。その際には採算がとれるものができるか、地域住民をどのように巻き込むか、体験用のスタッフや村の協力者を巻き込む体制をどのように築

くか等の課題がある。

５）評価

施設が先にできてしまったので、地域住民の協力を得ること等、ソフト面での仕組みが遅れている。地域住民側にも受け入れ体制（意識形成）ができていない。したがって、施設を拠点にした一過性のイベントが中心になってしまっている。農家民泊や都市との交流事業に対する事前の説明を行い、体験館を拠点にした地域全体の取り組みへの展開を期待する。

事例４　長野県四賀村　坊主山クラインガルテン

１）所在地

長野県東筑摩郡四賀村大字会田 1001-1

人口約 6,000 人

２）経緯

四賀村では、高齢化、過疎化が進む中で、昭和 60 年後半の頃から、遊休荒廃地を活用しようという動きが、地域住民の声としてあがる。中心になったのが現村長（当時は養鶏組合の会長）である。

平成２年、村民有志が集まり、四賀村グリーン・ツーリズム研究会が結成され、外国（ドイツ、オーストリア）の先進事例を視察する。平成４年にはモデル事業を立ち上げる。この結果を受けて平成５年には本格的な取り組みとなり、坊主山クラインガルテンの建設を開始する。

平成６年～９年にかけて、開発された区画から順次募集を開始する。４年間で 53 区画募集したところ、完売となる。そこで平成 11～15 年にかけて、別の場所に緑山クラインガルテンを追加造成した。平成 15 年現在、52 区画を募集している。最終的には坊主山クラインガルテン、緑山クラインガルテンを合わせて 131 区画とする予定である。

運営体制は、事業主体は四賀村であるが、管理運営は四賀むらづくり株式会社（第三セクター）が行う。また、活動支援団体として信州四賀村クラインガルテン倶楽部を結成している。四賀村クラインガルテン入園者（ガルテナー）は必ず同倶楽部に入会することになっている。入会すると、①月１回の行事へ参加することができる。②地元農家からの有機栽培の個別指導（有料）を受けることができる。③農具のレンタルや代替管理など農園管理のための手伝いに参加する。④倶楽部で発行する会報（年４回）を入手することができる。

＜行事の内容＞

４月　開園祭・有機栽培講習会

５月　山道散策・山菜狩りツアー

６月　クラインガルテンの日

７月　夕涼み会
８月　ジャガイモ掘りツアー
９月　クラインガルテンの日
１０月　収穫祭「DAIKON-RUN」
１１月　土作り講習会

３）内容と利用状況
①施設の概要
・坊主山クラインガルテン（ラウベ付農園：53 区画）
敷地全体　270～300 ㎡、ラウベ建築面積　27 ㎡ 、畑面積 100～120 ㎡
・緑ケ丘クラインガルテン（ラウベ付農園：52 区画）
敷地全体　270～300 ㎡、ラウベ建築面積　30 ㎡、畑面積　約 100 ㎡
・クラブハウス
クラインガルテンの中心となる場所。様々な行事をここで開催するほか、平日は職員が２人いて、利用者（ガルテナー）のより良い農園の管理のための相談窓口となっている。
・ゲストラウベ
試してみたい方に、１区画を体験区画として、１泊 5000 円（素泊まり）で提供。
②利用条件
・クラインガルテンの区画内における花・野菜作りは有機無農薬農法で行うこと。有機無農薬栽培が行えるように、講習会、個別指導あり。
・冬季期間を除きクラインガルテンを１か月に３泊ないし６日以上利用し、草むしりなどの必要な手入れを行うこと。
・クラインガルテンで必要な日用品・資材等は村内で調達すること。
・クラインガルテン区画の美しい庭づくりを積極的に行えること。
・クラインガルテン倶楽部の年間活動プログラムに参加する意志があり、倶楽部内、村内の交流事業に参加する意志のあること。
・信州四賀村クラインガルテン倶楽部憲章を遵守すること。

利用条件の１つに、「冬季期間を除きクラインガルテンを１か月に３泊ないし６日以上利用」という条件があるため、契約者としては時間がとりやすい定年退職をした中高年世代が多い。

＜信州四賀村クラインガルテン倶楽部憲章＞

私達は、土のにおいや緑を愛します。
私達は、自然と人に優しい有機栽培を行います。
私達は、農の持つ力とリズムの偉大さを尊びます。
私達は、自然から様々な英知を学びます。
私達は、農村の豊かな生活文化を学びます。
私達は、美しいクラインガルテンをつくります。
私達は、仲間たちとともにクラインガルテンをつくります。
私達は、誰もが気軽に訪れるクラインガルテンをめざします。
私達は、安らぎと潤いのあるクラインガルテンにします。
私達は、シンプルで環境に優しい生活をめざします。
私達は、クラインガルテンで豊かで充実した暮らしを楽しみます。
私達は、たくさんの人との出会いを喜びます。
私達は、家族や新しい仲間たちと集い楽しみます。
私達は、自分の経験や知識をお互いに学び合います。
私達は、クラインガルテンの素晴らしさを多くの人に伝えます。
私達は、責任と誇りあるクラインガルテナーになります。

③募集方法〈選考の方法〉

募集について、毎年２月に面接を兼ねた個人説明会を開催し、申し込み希望者にはクラインガルテンを下見することを義務づけている。特に、次の事項に留意して選考する。

・ 月にどれくらい利用できるか
・ 畑作業にどのくらい意欲があるか
・ 食材の安全性や環境問題にどのような意見を持っているか

④契約

・１年契約（５年間更新可)。農園の利用状況が良好な利用者については再契約も可。
・中途解約は認めないが、農園の管理が適正でない場合は、利用契約を一方的に解除する場合がある。

⑤利用料金

・坊主山クラインガルテン
10 万円～15 万円（３区画)、20 万円（18 区画)、25 万円（31 区画）
・緑ケ丘クラインガルテン
36 万円（41 区画）
・その他の料金
ラウベ光熱水費　実費
ゲストラウベ利用料（１泊 5000 円、２泊目以降 4000 円)、寝具代１組 1500 円
クラインガルテン倶楽部入会金　初年度のみ　10 万円

⑥田舎の親戚制度

地域との交流を深めるために各区画のガルテナーは村の農家１軒と肩のこらない親戚関係を結ぶ。親戚となった家族はガルテナーの畑作業の協力を行うなど、１対１の積極的

な交流などを行う。

４）課題、今後の方向性

坊主山クラインガルテンでは、有機農業を行うことが契約者の条件となっている。一方、親戚制度で親しい関係にある農家の方では有機栽培を行っていないところもある。そこで地元農家には、趣旨を説明して農薬などを渡さないようにお願いしている。最近では地元農家が有機に対して関心を持ちはじめ、有機に転換している農家もでてきた。

当クラインガルテンが様々な媒体を通して紹介されたので、村が有名になり、村外からの視察も年間 10,000 人を超えるようになった。

５）評価

すべて利用料金で運営している。赤字ではないが、儲けもないという状況である。ただし、クラインガルテンに必要な日用品や資材等は村内で調達するために、村内経済への波及効果はあると思われる。また経済効果だけでなく、過疎の村に都会から人が足を運び、都市と農村の交流が深まり地域住民に活気が出てきたことは大きな効果であったといえる。地元住民とガルテナーとの間にいざこざやトラブルもみられず、順調に交流事業が進められていることも評価できる。

当クラインガルテンが成功したのは、現村長がリーダーシップを発揮して先導したことが大きい。また、研究会を結成し、視察などを行い準備に時間をかけたことも大きな成功要因である。さらにだれでも利用できるのではなく、利用条件を設定し賛同できる人だけが利用しているので、農園管理も行き届き、エリア全体の環境が整備されている。ヨーロッパではクラインガルテン内に新しいコミュニティが形成されているが、当クラインガルテンも新たなコミュニティづくりという点で高く評価できる。

事例５　長野県飯山市　飯山市グリーン・ツーリズム協議会

１）所在地

長野県飯山市大字飯山 1-110-1

人口約 26,400 人

２）経緯

飯山市は昭和 30 年頃、農家における冬期の出稼ぎ対策として、きのこ栽培とスキー場開発にともなう民宿の経営が進められた。飯山市の観光入り込み数は平成５年にピークの 186 万人に達した。しかしその後スキー客は減少し平成 10 年には 127 万人となった。

このような状況の中、現市長がグリーン・ツーリズムの取り組みに熱心であり、飯山市は都市と農村の交流を積極的に推進する方向を打ち出した。平成５年３月に第３次総合基本構想、前期基本計画を策定し『ふるさと農業の推進』、『ふるさと観光の推進』を掲げた。また同年、農林水産省のグリーン・ツーリズムモデル事業の指定を受け、平成６年には飯

山市グリーン・ツーリズム推進協議会が発足し、市・Ｊ　Ａ・観光協会が中心となり推進事業を進めている。特に平成６年度から平成８年度までの３ヵ年をかけてグリーン・ツーリズムの交流拠点施設、体験施設を整備した。平成６年には「ふれあい広場」、平成８年には交流ターミナルとして「鍋倉高原森の家」、「北竜湖の館」、農林漁業体験実習館として「トピアホール」が完成した。

具体的な取り組みは以下の通りである。

①平成６年から自然体験教室開始

平成６年の１校から平成９年の 13 校、平成 14 年には 36 校と増加した。

②平成７年から日本生協連との提携による「グリーンライフ事業」

『第２のふるさとづくり』をキーワードとし、人との触れ合いを大切にする中で、普段着で村、自然、文化、そこに息づく人の営みを感じる取り組みである。「食から交流」また「交流から食」にこだわり、ここでしか味わえない郷土食を見直している。平成 13 年度まではＪＡ、日本観光協会、受入宿から構成されていたが、平成 14 年度は市、農業関係者、名人（インストラクター）も加わり飯山市全域にわたる組織として取り組んだところ、集客数が急増した。

③平成 10 年からは農林漁業体験協会の後援で「春霞浪漫」と銘打ったイベントを開催

④平成 11 年からは「子ども長期体験村」、「ＪＡこども村」、「わんぱく村」等の取り組み

⑤平成 11 年冬には「雪国体験」受け入れを開始

なお、グリーン・ツーリズム推進協議会は、市長、市議会、商工会議所、農協、観光協会、地区の会長、振興公社、森林組合、生協など 21 人から構成される。役割は、①市の観光、体験グリーン・ツーリズムのＰＲ、②ツアー企画の作成、③企画の進行、④市民に対するおもてなし講習会の開催などである。交流の基本は、人とのふれあいの場を持つことであるという観点から、だれもが飯山に来て良かった思ってもらえるよう、市民全員がもてなしの心を持つように呼びかけている。

３）内容と利用状況

「鍋倉高原森の家」は、（財）飯山市振興公社が運営している。同施設は地域の交流拠点であり、地域の人の新たな雇用の場でもあり、地域活性化の要となっている。支配人とスタッフ６人は全員県外の者である。地元の人では飯山の良さがわからない。むしろ県外の者の方が飯山の魅力を発見しやすく、魅力的な体験メニューを開発してくれると考えたからである。また、市民インストラクター制度をもうけ、市民の中で得意分野のある人を登録し、体験の時の指導者として協力してもらう（謝礼は支払う）。現在 180 人が登録している。なお、公社は独立採算であるが、市からの委託費として補助金を支給されている。

「北竜湖の館」はブナの原生林の自然探勝遊歩道の散策、ボート遊びの休憩所として、また郷土料理の講習などに利用されている。管理運営は、北竜湖観光協会が行っている。「トピアホール」は調理実習室、研修室、会議室、多目的大ホールを備え、自然体験教室、高校・大学の合宿などに利用されている。戸狩観光協会が管理運営を行っている。

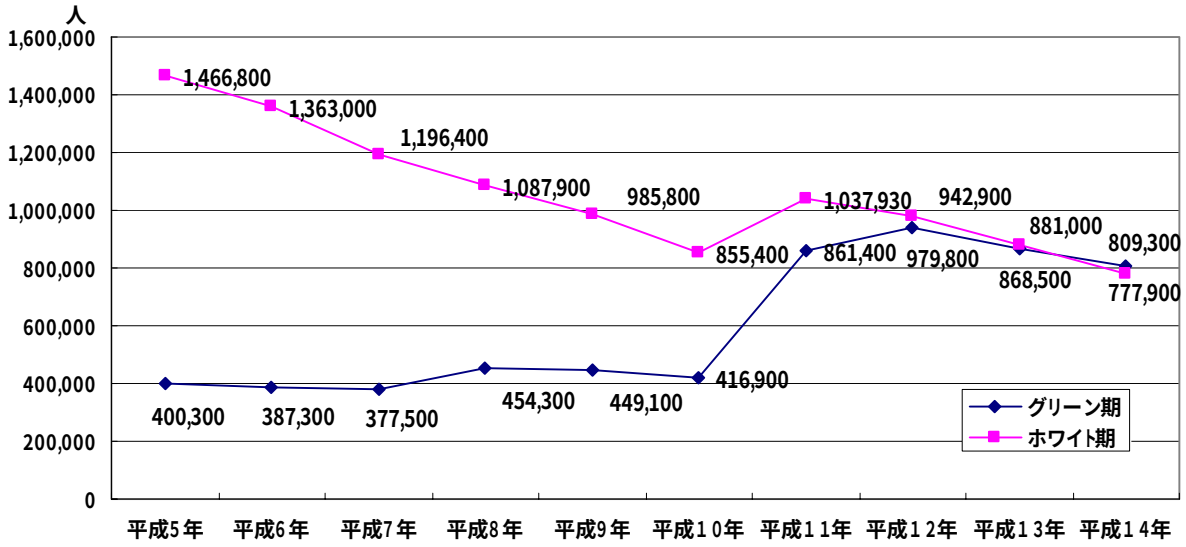
民宿での体験メニューは観光協会が企画する。市内には４つの観光協会（斑尾高原観光協会、戸狩観光協会、信濃平観光協会、北竜湖観光協会）があるが、いずれも自主的に企画メニューを開発している。民宿は受け入れ可能な範囲（１日に 10～15 人）で受け入れ、民宿の主人がインストラクターとなり、子ども達に様々な体験メニューを教えるなど、やり方はすべて受け入れ民宿に任せている。大人数で依頼があったときは、いくつかの民宿に分泊となる。また、受け入れ民宿がないときは、「森の家」に依頼している。これらの受け入れ民宿の調整は観光協会が行っている。

飯山市のグリーン・ツーリズムは、中心としては（財）飯山市振興公社が運営する「森の家」と、観光協会が企画する民宿での体験メニューの２本建てで進められている。

利用状況について観光客利用者数をみると、ホワイト期（スキーシーズン）は減少している。しかし、グリーン期の客数は増加しており、これは体験学習の成果といえる（平成 14 年にグリーン期とホワイト期の客数が逆転）。（図表 1- 3 参照）

また民宿での受け入れ数も増加している。民宿は、戸惑いはあるが子どもと接することができるのは楽しいという評価があがっている。また、グリーン期の収入は安定する一方で、学校のスケジュールとの日程調整が難しいという意見もある。（図表 1- 4 参照）

図表 1- 3　シーズン別観光客数の推移



資料　飯山市「グリーン・ツーリズム事業概要」

図表 1- 4　戸狩・信濃平自然体験教室受け入れ実績

	学校数	受け入れ人数	延べ宿泊数
平成６年	2	357	1,071
平成７年	12	1,771	4,677
平成８年	16	2,952	7,854
平成９年	22	3,242	9,954
平成１０年	28	3,905	12,030
平成１１年	40	6,073	17,636
平成１２年	52	7,914	24,119
平成１３年	57	8,500	24,988
平成１４年	57	8,126	23,835

資料　飯山市「グリーン・ツーリズム事業概要」

４）課題と方向性

体験学習はどこでもやっているので、いかに飯山の特徴を作り出すかが今後の大きな課題である。リピーターの確保のためには新たな企画が必要である。人と人とのつながりを重視し、再度飯山に来たくなるような環境づくりを検討する。

民宿は世代交代の時期であるため、いつまで続けられるか、不安定な状況である。今後は、「森の家」の活性化を進める。そのためには行政との関わりも検討する必要がある。

県外から人を呼ぶことだけでなく、飯山市自身も活性化する必要がある。特にこれからの飯山市を担っていく地元の子どもたちに、地域の伝統文化を教えることにも力を入れる。また、スローフードの取り組みも体験メニューに取り入れ、癒しの場としての取り組みも進めるとしている。

５）評価

グリーン･ツーリズムを重点産業として位置づけ、飯山市全体の取り組みになっている。観光客数は平成 10 年の 127 万人から平成 14 年では 159 万人に増加しているが、これはスキーシーズンの観光客数の減少を十分に相殺するほどスキーシーズン以外の観光客数の増加があったためで、体験学習等のグリーン・ツーリズムの成果として評価できる。

（財）飯山市振興公社が運営する体験館と民宿で行う体験教室と２本立ててグリーン・ツーリズムを展開し、多様なメニューを用意できたことが成功要因の１つとして考えられる。また、地域ぐるみでグリーン・ツーリズムを推進する体制を構築できたことも成功要因の１つであろう。

⑷ グリーン･ツーリズム推進の担い手

グリーン・ツーリズムは、目的も形態も多様である。地域ぐるみによるグリーン・ツーリズムの推進のためには、農家、旅館・ホテル・民宿、観光施設、地域住民、行政等のグリーン・ツーリズムに関係する主体の間で目的を共有化、明確化をすることがまず求められる。そして、その目的の実現のためにはどのような形態のグリーン・ツーリズムを実施し、どのような受け入れ体制を整備するかを決めることになる。その際、地域ぐるみでグリーン・ツーリズムを着実に進めるためには、実施されるグリーン・ツーリズムの目的に応じて各主体が果たすべきそれぞれの役割と責任を明確にし､自覚することが求められる。

①交流促進型グリーン・ツーリズム

「カントリーハットやまびこ館」の事例では、行政が交流の拠点施設を建設・運営しているが、都市との交流を図りたいという農家等の地域住民のニーズがあれば、住民自らの創意工夫によって住民自らが交流活動を展開することは可能であると考えられる｡一方で、地域に展開される交流活動の効率化を図るための支援は行政の役割といえる。

②副業型グリーン・ツーリズム

具体的形態としては、農業体験、農家民泊などである。これらは、農家が自己の副収入の獲得を目的に行われるものであり、農家が自己の経営責任のもとで主体的役割を果たすことが求められる。山村体験館「たかやす」の事例では、補助金等の行政からの支援を受けずに、農家の主婦ができる範囲のことを楽しみながら行い、成功している。

副業型グリーン・ツーリズムは、基本的には農家等の自己責任の下で実施されるべきであるが、地域全体から見たとき地域のＰＲ、女性や高齢者の生きがいづくりのきっかけとなるなど、経済的、社会的効果を期待することができる。したがって、行政や観光協会等はこれらのメニューに関する情報発信などの支援を行うことも検討するべきである。

③産業創出型グリーン・ツーリズム

地域産業政策の視点から行政が主体的役割を担う必要がある。行政に求められる役割は、グリーン・ツーリズム振興ビジョンを策定することであるが、その際に地域住民の参画の下に地域住民の創意を生かした計画づくりを行い、特徴ある個性的なグリーン・ツーリズムの展開を図ることが重要である。

飯山市グリーン・ツーリズム協議会の事例は、スキー客の減少に対する対策として、行政、特に市長がリーダーシップを発揮しながら、新規産業の創出のためにグリーン・ツーリズムの推進に積極的であったことを示す。

④高付加価値型グリーン・ツーリズム

既存事業の販売拡大あるいは高付加価値化を図るためには、農家、民宿、レストラン等個々の事業者の範囲内でできることと、行政が主体となるべきことがある。レストランが

地産地消を売り物にして顧客の拡大を図ることなどは､個々の事業者の役割である｡一方、ファーマーズマーケットなどの拠点施設を建設し、場を提供することなどは行政に期待される役割である。飯山市グリーン・ツーリズム協議会の事例は、民宿がスキーシーズン以外の時期に集客を図るための対策として体験メニューを実施し、地域ぐるみでそれを支えてきたといえる。

⑤地域資源活用型グリーン・ツーリズム

グリーン・ツーリズムによって地域資源の有効活用を図ることは、まちづくりそのものである。したがって、行政と地域住民の協働によって、地域資源を生かしてどのような形態のグリーン・ツーリズムが地域で可能であるかを検討することが求められる。そして、その中で相互の役割分担を明確化していくことが必要である。

「するぎ農園村」の事例は、増加する遊休荒廃地に対する地域住民、行政の危惧から問題解決の方策として、施設整備は行政が行い、運営は地域住民が行うことによって遊休荒廃地の有効活用を図ろうとしたものである。坊主山クライガルテンの事例も増加する遊休荒廃地に対する地域住民と行政の危惧から生まれたものであり、行政によって施設整備され、またクラインガルテンの基本方針として遊休荒廃地を有効活用するという目的に忠実に行政を中心として策定され、また運営されている。

⑥景観保全・文化保存型グリーン・ツーリズム

地域の自然環境、居住環境を守ることは、そこに住む住民の願いであり、またその保護のために住民ができることは住民自身が行うことが必要である。しかしながら、住民の力だけではできない保護活動については、行政が積極的に関与することが求められる。

「飯山市グリーン・ツーリズム協議会」の事例は、リゾート開発に伴い自然環境が荒廃することに対する市長の危機意識から農地の保護に取り組んだものであり、トップの意識が重要な役割を果たしたといえる。

⑦地域宣伝型グリーン・ツーリズム

地域のＰＲを目的として展開されるグリーン・ツーリズムは、行政や観光協会などが中心となって推進していくことが求められる。運営主体はグリーン・ツーリズムの形態によって異なるであろうが、地域全体のグリーン・ツーリズムを推進するための支援と地域の活動を宣伝する役割が行政や観光協会などに求められる。飯山市グリーン・ツーリズム協議会の事例では、観光協会が体験メニュー等の企画、PR を行い、行政もホームページを通じて全国に情報発信を行っている。

図表 1- 5 は、グリーン・ツーリズムの目的を遂行するための担い手を５つの事例調査に関してまとめたものである。現実には、目的と目的を実現するための各主体の役割と責任との関係はより多様であると考えられる。重要な点は、地域でグリーン・ツーリズムに取り組む目的と同時に役割分担と責任に関する合意形成を図ることが必要不可欠であると

いうことである。しかしながら、行政の従来型の政策形成の過程においては合意形成を図る場の確保が不十分である、合意形成を図る手法がない、あるいは地域住民のキャパシティ・ビルディング（能力の構築）が不十分などの問題があり、不十分な合意形成のまま政策決定がなされたケースが少なからずあったと考えられる。合意形成を図る手法の１つとして、まちづくりの取り組みではワークショップという手法がしばしば用いられる。ワークショップの内容及び丘陵地での実施の様子については３．で取り上げることにする。

図表 1- 5　事例調査から見た目的遂行の主な担い手

主体 目的	農家	民宿 ・旅館	地域住民	行政	観光協会
交流促進型				◎	
副業型	◎				
産業創出型				◎	
高付加価値型	◎	◎			
地域資源活用型	◎		◎	◎	
景観保全・文化保存型				◎	
地域宣伝型				◎	◎

（注）◎は目的遂行の中心となる主体。

2. 丘陵地におけるグリーン･ツーリズムの取り組み

(1) 丘陵地におけるグリーン･ツーリズム推進の取り組み

現在、当事者たちは必ずしもグリーン・ツーリズムという言葉を意識していないかもしれないが、丘陵地においても都市住民との交流促進を図る等の目的ですでにグリーン・ツーリズム的な事業の展開が見られる。図表 2-1 から図表 2-4 は、産地直売所、加工品製造・販売、体験農園、体験民宿に関して丘陵地におけるすべてのグリーン・ツーリズム的な事業をリストアップしたものではないが、把握可能な範囲で収集、整理したものである。

図表 2- 1　直売施設

	名　称	設　置　場　所	開催期間	開　　催日	開催時間	販売品目
1	農産物直売所	ふれあいパーク三里浜内	通年	毎日(冬期水曜休)	9:00　～19:00	野菜、果樹、花等ソフトクリーム等
2	ファーマーズマーケット	みくにショッピングワールドイーザ内	通年	毎日	10:00～	野菜、果樹、花等
3	三国朝市	三国温泉ゆあぽーと前	3～12 月	毎日曜、祝日	6:00　～10:00	魚介類、野菜、乾物等
4	緑の丘（池上農産物直売所）	三国町池上	通年	毎日（火曜休）	10:00～	野菜、果樹、花等
5	セントピア夕市	セントピアあわら前	5/ 末～12/ 末	毎土曜	15:00～	野菜、果樹、花等
6	来い恋夕市	あわら市二面 JA 施設内	4/ 中～12/ 末	毎火曜	15:30～	野菜、果樹、花等
7	JA フルーツ直売センター	あわら市牛山	5/ 下～11/ 下	毎日	9:00　～16:00	メロン、スイカ、ナシ、ミディトマト等
8	うららの里（滝の市）	あわら市滝フルーツライン沿い（創作の森近く）	6/上～	毎日（水曜休）	10:00　～18:00	柿、梅、メロン、スイカ、その他野菜等
9	かなちゃん市場	JA 花咲ふくい金津支店敷地内		10、20、30 日	10:00　～14:00	野菜

（資料）三国・芦原・金津丘陵地営農対策会議資料より作成。

図表 2- 2　加工品製造・販売

	直売	加工	加工品	加工場所	運営主体	直売店以外で購入できる場所	直売店の開催情報
1	○	○	豆腐、豆乳等	三国町嵩	きっちょんどん	ふれあいパーク三里浜 イーザ ワイプラザ	毎日（日曜休）9:00～13:00、飲食可
2		○	漬け物	三国町	三里浜特産農協	ふれあいパーク三里浜	
3		○	メロン漬け	あわら市北潟加工場	北潟加工グループ		
4		○	かきもち	あわら市	もちっこ会	セントピアあわら、来い恋夕市	
5	○		ソフトクリーム	あわら市国影	田島牧場		4～10 月毎金土日曜 11:00～16:00
6	○		ソフトクリーム	ふれあいパーク三里浜内	ファーム高橋 手造りミルク工房		通年毎日（冬期水曜休）9:00～19:00
7	○	○	かきもち、あられ、かりんとう	あわら市柿原	ポパイランド		
8	○	○	豆腐	あわら市二面	㈱藤嶋食品		
9	○	○	豆腐	三国町滝谷	奥林商店		

（資料）三国・芦原・金津丘陵地営農対策会議資料より作成。

図表 2- 3　体験農園・施設

	名称	開催時期	体験内容	申し込み	体験・入園料	収穫物の値段	代表	住所
1	さつまいも体験農園	6 月下旬、11 月上旬	さつまいも植付け・収穫	随時 当時申し込み可	体：植付け・収穫3,000 円 収穫のみ 3,500 円	体験料に同じ	JA 花咲ふくい浜四郷青壮年部	三国町山岸
2	ひだまり農園	8 月 12 日	ネットメロン収穫	不要		1,000 円/1 個	布谷冨美子	三国町黒目
3	朝倉梨栗園	9 月下旬～10 月下旬	栗拾い	前日までに要予約	入：中学生以上 300 円/人 小学生以下無料 焼き栗を希望の場合 ﾊﾞｰﾍﾞｷｭｰｺﾝﾛ 1,000 円	800 円/kg	朝倉雪	あわら市城
4	勝木農園	6 月下旬～7 月上旬	ハウススイカ収穫	2 日前までに要予約（19～21 時）	体：200 円/人	1,000～1,500 円/個	勝木利信・澄子	あわら市牛山
5	芦原なし観光組合	8 月 20 日～9 月下旬	なし狩り	前日までに要予約	入：大人 800 円/人 小人 600 円/人		よねくら梨園	あわら市波松番堂野、松影
6	田嶋牧場	通 年　10:00 ～12:30	牛給餌体験	前日までに要予約	体：500 円/人		田嶋恵子	あわら市国影
7	谷川農園	6 月上旬～9 月下旬 11 月上旬～2 月下旬	ハーブの摘み取り リースアレンジ	前日までに要予約	体：500 円/人＋材料代		谷川菜穂恵	あわら市波松
8	ラーバンの森	通年	パンづくり、牛・ロバとのふれあい、豆腐づくり、うどんづくり	随時申し込み可			山崎一之	三国町陣ヶ岡
9	藤井農園	開花時期　6/中	ラベンダー摘み	随時				三国町
10	サンビーフ斎藤		牛給餌体験					三国町池上
11	瑞香園	6/上 6/上～8･中	ラベンダーの摘み取り ブルーベリー収穫	随時			川野寿明	あわら市花の杜 5-5-43

（資料）三国・芦原・金津丘陵地営農対策会議資料より作成。

図表 2- 4　体験民宿

	名　　称	体 験 内 容	場　　所
1	温泉民宿　一丸	梅作り、芋掘り、山菜採り、刺し網漁業、干し柿、つるし柿	三国町梶神明 58-3
2	民宿　クラブハウス八木	なしの収穫、酪農、芋掘り	あわら市船津 31-9-1

（資料）三国・芦原・金津丘陵地営農対策会議資料より作成。

(2) 丘陵地におけるグリーン･ツーリズム･モデルコースの評価

三国・芦原・金津丘陵地営農対策会議では、「農と文化のあるまちづくり」基本計画に基づき、坂井北部丘陵地の農林水産業や美しい自然、文化、観光施設など豊かな資源を生かし、農村と近隣都市との交流を図るとともに、次代の担い手となる子供たちに食料や農業等について関心と理解を促すことを目的として、平成 14 年度より「農と文化の体験」と呼ぶいくつかのモデルコースを設定してグリーン・ツーリズム的事業に対して支援を実施してきた。

平成 14 年度は、「A 地引網体験」、「B 牛やロバとのふれあい体験と豆腐づくり体験」、「C さつまいも掘りと動物とのふれあい」、「D 越前柿収穫体験と『創作の森』で陶芸」、「E 牛とのふれあい体験と乗馬体験」の５つのモデルコースを設定し、延べ大人 112 名、子供 109 名の合計 221 名の参加申し込みがあった。ただし、A の「地引網体験」は天候不良のため中止となり、天候によって実施に影響を受ける企画については課題として残った。

平成 15 年度は、「A 越前柿収穫体験と『創作の森』で陶芸」、「B 動物とのふれあいとリ

ースアレンジ体験」、「C ラーバンの森とパン焼き体験」の３つのモデルコースを実施した。それぞれのコースの概要と実績は、図表 2- 5 に示した通りである。３コースの合計で大人 24 人、子供 27 人の計 51 人の参加があった。参加者向け（ただし、中学生以上の参加者対象）に実施したアンケート調査に基づいて、丘陵地におけるモデルコースに対する参加者の感想、意見等を検討する。

図表 2- 5　平成 15 年度「農と文化の体験」の概要と実績

コース	実施日時	実施場所	参加者数		体験料	体験内容
A 越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸（昼食有）	11 月 2 日（日）AM10:00～15:30	金津町 山室 金津町青ノ木	大人 (中学生以上)	9 人	2,800 円	越前柿を収穫して渋抜き体験をしましょう。出来た柿はおうちへお持ち帰りください。柿の収穫の後は「創作の森」ですてきなレストラン「アンビション」でランチタイム。ランチの後は創作工房で陶芸にチャレンジ。自分だけの作品を作りましょう。
			小学生	3 人	2,600 円	
			幼児 (３歳以上)	1 人	900 円	
B 動物とのふれあいとリースアレンジ体験(昼食有)	11 月 16 日（日）AM10:00～15:30	三国町 池上 芦原町 牛山	大人 (中学生以上)	5 人	2,800 円	みんなで牛飼いになって牛とふれあいましょう。お昼は農家直営店「牛若丸」で地元産の肉や野菜を使ったランチが食べられますよ。ランチが終わったらリースアレンジにチャレンジ。自分のアイデアで存分に。先生がいるから小さい子でも大丈夫。
			小学生	7 人	1,700 円	
			幼児 (３歳以上)	2 人	500 円	
C ラーバンの森とパン焼き体験（昼食有）	11 月 23 日（日）AM10:00～15:00	三国町陣ヶ岡 (ﾗｰﾊﾞﾝの森)	大人 (中学生以上)	10 人	2,000 円	「ラーバンの森」にいる牛やロバや鶏とふれあいましょう。農家の雰囲気や自然を十分堪能してください。動物とのふれあいの後は地元で採れた小麦や卵、野菜等を使ったパンやシチューづくりにチャレンジしてみましょう。まき割もがんばって！パンが焼きあがったらお昼ごはんにしましょう。おいしいシチューと一緒に。
			小学生	13 人	1,500 円	
			幼児 (３歳以上)	1 人	1,500 円	

（資料）三国・芦原・金津丘陵地営農対策会議資料

１）参加者のプロフィール

「農と文化の体験」コースへの参加者のプロフィールをみると、以下の通りである。年齢的には 30 歳代（42.3%）と 40 歳代（30.8%）が多く、30 歳代～40 歳代で全体の約 3/4 を占める（図表 2- 6）。性別については女性の参加者が全体の約 3/4 である（図表 2- 67）。また、子供と一緒に参加したが約 6 割、妻又は夫が約 3 割であり、多くが家族による参加であった（図表 2- 8）。

図表 2- 6　参加者の年齢

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.10歳代	3 (23.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (11.5)
2.20歳代	1 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.8)
3.30歳代	4 (30.8)	2 (50.0)	5 (55.6)	11 (42.3)
4.40歳代	3 (23.1)	2 (50.0)	3 (33.3)	8 (30.8)
5.50歳代	2 (15.4)	0 (0.0)	1 (11.1)	3 (11.5)
6.60歳以上	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

図表 2- 7　参加者の性別

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.男	4 (30.8)	1 (25.0)	2 (22.2)	7 (26.9)
2.女	9 (69.2)	3 (75.0)	7 (77.8)	19 (73.1)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

図表 2- 8　誰と一緒に参加したか（複数回答可）

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.個人	1 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.8)
2.父又は母	3 (23.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (11.5)
3.妻又は夫	4 (30.8)	0 (0.0)	4 (44.4)	8 (30.8)
4.子ども	4 (30.8)	4 (100.0)	8 (88.9)	16 (61.5)
5.友人・知人	2 (15.4)	0 (0.0)	1 (11.1)	3 (11.5)
6.その他	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

参加者の住所をみると、約半分は福井市であり、また三国町、芦原町、金津町からの参加者はほぼ同数であり、これら３町の合計で全体の半分となる（図表 2- 9）。したがって、ほとんどが近隣市町あるいは地元からの参加であった。

図表 2- 9　参加者の住所

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.福井市	6 (50.0)	0 (0.0)	5 (55.6)	11 (45.8)
2.三国町	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (33.3)	3 (12.5)
3.芦原町	2 (16.7)	1 (33.3)	1 (11.1)	4 (16.7)
4.金津町	4 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (16.7)
5.県内	0 (0.0)	2 (66.7)	0 (0.0)	2 (8.3)
6.県外	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	12 (100.0)	3 (100.0)	9 (100.0)	24 (100.0)

今回の参加者がこれまで体験交流の企画にどれだけ参加したことがあるかについては、まず昨年度実施の「農と文化の体験」コースへの参加状況についてみると、昨年度も参加したのは 16%であり、リピーターは少なかった（図表 2- 10）。また、「農と文化の体験」以外の他の体験交流企画への参加経験についてみると、半数の参加者が今回初めての参加であった（図表 2- 11）。

図表 2- 10　前年度「農と文化の体験」コースへの参加

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.参加した	3 (23.1)	0 (0.0)	1 (11.1)	4 (16.0)
2.参加しなかった	10 (76.9)	3 (100.0)	8 (88.9)	21 (84.0)
合計	13 (100.0)	3 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

図表 2- 11　他の体験交流への参加回数

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.ない	9 (69.2)	2 (50.0)	3 (33.3)	14 (53.8)
2.1回	2 (15.4)	1 (25.0)	2 (22.2)	5 (19.2)
3.2～5回	2 (15.4)	0 (0.0)	4 (44.4)	6 (23.1)
4.6～10回	0 (0.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	1 (3.8)
5.10回以上	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

２）「農と文化の体験」コースに対する参加者の評価

「農と文化の体験」コースに参加した感想を①自然・環境、②体験内容、③施設、④料理、⑤もてなし・接客、⑥価格、⑦全体の項目に関して尋ねた（図表 2- 12）。

全体的な感想をみると、「大変満足」が 56.0%、「やや満足」が 32.0%である一方、「やや不満」や「不満」といった感想はなく、ほとんどの参加者が満足している。特に、満足度が高かったのは、体験内容や自然・環境、もてなし・接客に関する項目であり、体験内容では 76.9%、自然・環境ともてなし・接客では 68.0%が「大変満足」と回答した。施設、料理に関しては、「大変満足」と「やや満足」の合計がそれぞれ 88.0%、76.0%であり、概ね満足しているが、料理に関しては不満のあるコースもあった。価格に関しては、「大変満足」と「やや満足」の合計が 57.7%であり、「やや不満」や「不満」といった回答はなく満足感はみられるが、他の項目に比べると満足度は低く、価格設定に関しては、今後の検討課題となりそうである。

図表 2- 12　参加した感想

①自然・環境

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	8 (61.5)	2 (66.7)	7 (77.8)	17 (68.0)
2.やや満足	2 (15.4)	0 (0.0)	2 (22.2)	4 (16.0)
3.普通	3 (23.1)	1 (33.3)	0 (0.0)	4 (16.0)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	3 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

②体験内容

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	10 (76.9)	1 (25.0)	9 (100.0)	20 (76.9)
2.やや満足	1 (7.7)	2 (50.0)	0 (0.0)	3 (11.5)
3.普通	2 (15.4)	1 (25.0)	0 (0.0)	3 (11.5)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

③施設

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	4 (30.8)	1 (25.0)	6 (75.0)	11 (44.0)
2.やや満足	7 (53.8)	2 (50.0)	2 (25.0)	11 (44.0)
3.普通	2 (15.4)	1 (25.0)	0 (0.0)	3 (12.0)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	8 (100.0)	25 (100.0)

④料理

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	2 (16.7)	2 (50.0)	9 (100.0)	13 (52.0)
2.やや満足	4 (33.3)	2 (50.0)	0 (0.0)	6 (24.0)
3.普通	4 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (16.0)
4.やや不満	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.0)
5.不満	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.0)
合計	12 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

⑤もてなし・接客

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	7 (58.3)	2 (50.0)	8 (88.9)	17 (68.0)
2.やや満足	1 (8.3)	1 (25.0)	0 (0.0)	2 (8.0)
3.普通	3 (25.0)	1 (25.0)	1 (11.1)	5 (20.0)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.0)
合計	12 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

⑥価格

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	6 (46.2)	0 (0.0)	3 (33.3)	9 (34.6)
2.やや満足	1 (7.7)	3 (75.0)	2 (22.2)	6 (23.1)
3.普通	6 (46.2)	1 (25.0)	4 (44.4)	11 (42.3)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

⑦全体

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	6 (50.0)	1 (25.0)	7 (77.8)	14 (56.0)
2.やや満足	4 (33.3)	2 (50.0)	2 (22.2)	8 (32.0)
3.普通	2 (16.7)	1 (25.0)	0 (0.0)	3 (12.0)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	12 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

また、「今後も『農と文化の体験』コースに参加したいか」の問いに対しては、12.0%の回答者が「積極的に参加したい」としているが、88.0%は「機会があれば参加したい」と回答しており、参加意欲はなくはないが、必ずしも積極的な参加意欲を持っていない。したがって、全体的に参加者の満足度は比較的高いものの、リピーターを確保できるような内容になっているとは言い難く、改善の余地が十分にあるといえる。

図表 2- 13　今後も参加したいか

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.積極的に参加したい	2 (16.7)	0 (0.0)	1 (11.1)	3 (12.0)
2.機会があれば参加したい	10 (83.3)	4 (100.0)	8 (88.9)	22 (88.0)
3.参加しない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
4.分からない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	12 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

3. 住民参加型地域づくりとグリーン･ツーリズム

⑴ ワークショップと進め方

１）ワークショップの考え方

ワークショップ（ｗｏｒｋｓｈｏｐ）とは、職場、作業場、工房を意味する言葉で、小グループで意見交換や共同作業を行いながら進める参加型学習の技法であり、作業をふまえた相互の学び合いである。また、教える･教えられるという関係で学習するのではなく、学習者が積極的に他の学習者の意見や発想から学び合う手法である。したがって、参加するすべての人々が、それぞれ異なる知識や経験を持ち、その相互発信を通して学習が進められ、行動変容へ向かう。そこでの学習者一人ひとりに変容をもたらすと同時に、集団での創造的な活動の展開にもつながる。

相互の意見の発信と気づきを大切にする進行となるので、１つのグループの人数は４～６人が望ましく、個人で考える時間と、集団で話し合ったり作業する時間とを組み合わせてプログラムを作成する。

ワークショップの進行は、ファシリテーター（コーディネーター）がテーマの内容を深めたり、広めたりして進める。ファシリテーターは学習活動の進行を促進、活性化するのであり、指導したり内容をコントロールすることがあってはいけない。学習者間の交流がうまく進み、結果として学習者や集団の協働を促進することが役割である。

２）ワークショップによる学習プログラム企画の際の留意点

①「気づき・学び合い・ふりかえり」の流れ、プロセスを大切にする
②他のグループと学習成果を分かち合う
③学習者が自ら考え、自分で解決する場面を作る
④学習者がプログラムを通じて変容するプロセスを大切にする

３）ワークショップの具体的な手法

① KJ 法・・テーマとなる問題について、学習者が意見やキーワードを短文にしてカードに書き、その記述内容の類似性に着目してカードをグルーピングし、タイトルなどを付けながら頭を整理していく。カードの内容に触発されて新しいアイデアなども出し合う。
② シンポジウム・・ある特定のテーマについて代表的な意見を持っている人が複数発表し、その内容を参考に会場の参加者（フロアー）と意見交換を行う。
③ パネルディスカッション・・ある特定のテーマ人やその問題について代表的な意見を持っている人がパネラーとして登壇し、コーディネーターの進行で意見交換をする。またその内容を参考に会場の参加者（フロアー）と意見交換を行う。
④ ブレーンストーミング・・自由な発想で討議し、創造的に問題解決を目指す手法。10 人前後の討議が効果的。
⑤ ロールプレイ・・場面設定をして、学習者が役割を分担して演技をすることにより、

様々な立場の人のことを考え理解し、多様な視点を養うことができる。

⑥ タウンウォッチング・・町を歩きながら、問題のある所、魅力ある場所などを探す。

4）ワークショップの進め方

（丘陵地におけるワークショップを想定）

1．　テーマの提示

2．　グループ分け・・（だいたい４～６人で１グループが望ましい）

3．　受け入れ体験の感想、この地域の良い点、この地域の課題を出し合います。これはそれぞれポストイットに書き出し、それを模造紙にはって、同じ内容のものをまとめ、ラベリングしていきます。

4．　受け入れ体験の感想、この地域の良い点、この地域の課題をみつける作業をふまえて、「住民によるグリーンツーリズム」のイメージを出し合います。どのようなことをしてみたいか、自由に書き出します。

5．４のワークをふまえ、具体的なグリーンツーリズムの企画を考えます。

- 目的、コンセプト
- 場所（どこで）
- 主催者（事務局）
- 運営形態
- 参加の対象者
- メニュー（どのような内容にしたら集まるか）
- 時期
- 資金調達
- 地域連携（どこと、どのように）
- ＰＲ

⑵ 丘陵地におけるワークショップの実践と結果

①日時

平成 15 年１２月１０日（水）１３：３０～１６：００

②参加者

１６人（受け入れ体験農家、三国・芦原・金津各町からの担当者）

③テーマ

三国・芦原・金津丘陵地で展開するグリーンツーリズムを考える

～私たちの地域にあったグリーンツーリズムを、企画してみましょう～

④グループ分け

８人で１グループをつくる

２グループ、Ａ班、Ｂ班に分ける

各班にコーディネーターを１人ずつ配置

⑤ワークの内容

ワーク１　受け入れ体験を行った感想を出し合いましょう

・体験を行う時期が繁忙期と重なってしまった。時期を検討する。
・体験学習の趣旨が参加者に伝わらず、あぶないことまでやってしまった。また、植物や動物にとって、やってはいけないことをやってしまうこともあった。楽しさだけでなく、ルールはきちんと作らないといけない。受け入れ側の負担が大きくなる。
・事務局体制をしっかりする。当日のキャンセルの連絡、スタッフ不足など事前の打ち合わせが必要。
・トイレなどの設備は整える。
・適正な料金を検討する。

ワーク２　この地域の良い点（魅力、自慢したいこと）を出し合いましょう

Ａ班

〇観光資源

・観光地に恵まれている
・スタイルの良い丘陵地が広がっている
・近くに古い港町がある
・温泉地がある
・福井を代表する観光地

〇アウトドアの遊び場が多い

・公園が多い（無料）
・サーフィンが出来る
・運動場が多い
・道路がまっすぐなので車を走らせると気持ちが良い（北海道のよう）

・釣りが楽しめる
・公共施設が充実している
・観光地、ゴルフ場が隣接している
・温楽（温泉がある）
〇景観が良い
・山があり海があり、田畑、自然に恵まれている
・丘陵地ならではの360度大パノラマ
・広域農道から見た畑がすばらしい
・近くに湖や林があり、自然が多い
〇交通の便
・交通の便がよい
・空港、道路、鉄道の便が良い
・福井市、金沢市に近い
・おもちゃのようなえちぜん鉄道
・三国、芦原、金津を結ぶフルーツライン（広域農道）
〇環境が良い
・空気がうまい
・うまいわき水がある
・へんぴで孤立しているところが良い
・何もないので良い
・海から吹く風が全ての作物の味を良くしている
〇おいしいものがたくさんある
・四季いろいろな果物、野菜、米、花がある
・食物が美味しい
・うまい水があると米もうまい
・穫れる物、全部味がよい
・食べ物（海産物、青果物、米）なら何でもある
・カニ、サシミ
・カキがうまい
・そばがうまい
〇土地
・土地が安い
・空き地がたくさんあり道路がすごい
〇人
・女性が美しい
・住民の個性が素朴
・農家の人それぞれが個性があって良い
・人が少ないのでコミュニケーションがとりやすい

Ｂ班
〇温泉
・温泉が良い
〇美味しい食べ物
・農産物が豊富
・何でも穫れる
・いろいろな果物をつくっている
・食べ物がおいしい
・越前ガニがある
・スイカ、メロン、ナシがおいしい
・野菜が新鮮
〇交通
・関西圏から近い
・高速、港があり交通の便が良い
〇遊び場
・お金を使わず子どもと遊べる
・スキー場が近い
・海がきれい
〇自然と環境
・自然と空気がよい
・自然が豊富
・景色がよい
・海、山がきれい
・空気がきれい
・冬になると朝夕にガンが飛ぶ
〇人がら
・人なつっこい

ワーク３　この地域の課題を出し合いましょう

Ａ班
〇人間性
・知らない人と交流が苦手
・人の成功をねたむ
・集落で意見はまとまらない
・すぐに補助金をほしがる
・他人のことを気にしすぎる
・依頼心が強く積極性に欠ける
・異業種間の交流がない

・個性が強すぎる
・何もない
〇道路、アクセスが悪い
・公共交通利用が少ない
・公共交通の本数が少ない
・道路が整備されすぎて観光客が丘陵地を通り過ぎていく
・福井、金沢に行くのに遠い
・車でしか移動できない
・交通の便が中途半端
・広域農道にトイレがない
〇畑の地質
・減反の田があれている
・水はけの悪い畑が多い
・不作地が多い
・石ころが多い畑
・遊休地が増えている
・地質の良いところと悪いところの差が大きい
・畑地なのに木がある
〇農作物
・独自性のある生産物ができない
・農作物が中途半端
〇海の規制
・サザエが獲れない
〇自然
・雪が降る
・冬は風が強くて釣りにいけない
・魚がつれなくなってきた
〇行政の体質
・商売は県庁所在地という意識が強い
・都市計画など行政の企画力不足
・多くの地域資源がありながら、活かせない
・都市化が進み田舎の良さが失われてきた

Ｂ班
〇宣伝不足
・ＰＲがうまくできない
・県外のイメージが悪い
・認知度が低い
・都会の人が何をもとめているかわからない

・体験受け入れの場所がわからない
・地元でも何がどこで作られているか知らない
〇情報不足
・（他地域の情報がないので）体験料の価格がつけられない
〇交通アクセスが悪い
・車がないとどこにも行けない
〇施設が足りない
・道路沿いにトイレがない
・県立大の農場が開放されていない
〇旅館の経営
・旅館でうまいものがでない
・旅館の宿泊代が高い
・旅館の売りがない
〇交流人口が減少
・観光農園の客が減少
・観光客が減っている
・温泉があるのに宿泊客が少ない
・客の財布の紐がかたい
〇連携ができてない
・閉鎖的
・保守的
・横の繋がりが少ない
・遊んでばかりいると白い目で見られる
・一人で新しいことをすると足を引っ張る人がいる
〇やる気がない
・官民一体化　官への依存型が高い
・青果物の販売を農協にまかせている
・青果物の価格を自分で決められない
〇天候
・冬場の雪
・天候に左右される

ワーク４　この地域であなたが展開してみたいグリーンツーリズム（都市と農村の交流事業）をイメージしてみましょう。どこで、どんな内容。

〇内容の提案
　時期は年間を通して行うには１泊２日。内容は種まきから収穫まで、その間、数回管理に来てもらい、農家と直接話し合いをする。体験者がいないときは農家（生産組織があれば人的資源をもらう）が管理する。１日は体験、その日は宿泊して２日目に観光案内、文

化交流、参加者の交流を行う（宿泊先は、民宿、芦原温泉）。収穫時には、獲れたもので料理をする。

水産業をテーマにしたグリーン・ツーリズム（ブルー・ツーリズム）。アメリカやヨーロッパでは釣りのガイドシステムが確立している。日本でも北海道ではプロのガイドがいる。日本海に面したこの地域は水産資源に恵まれており、釣りの対象魚もゆたかであるので、フィッシングロッジ的な宿泊施設を作り、漁業体験、農業体験を都市の人に味わってもらう。

農家の人達が自分たちで作った野菜、果物を加工して直売したい。漬け物を作る人、菓子を作る人、同じ所でいろいろ加工できる施設があると、直売もでき、客も喜ぶ。またその農家の畑や田で体験して、施設で食事をしても良い。

体験の輪を広げられないか。農産物が豊富な地域にあるので、収穫体験はもちろん、農業体験一式とする。新規就農者も増えることが期待。私はハーブを通して考えている。都会（町の人）の人を招いて畑の中でお茶をする。ハーブをつみ取ってその場で簡単なお菓子、料理が作れたら最高。それを行う場が必要。食べ物もいいが、今、リースをやっているので、ハーブの香りの中でリース作りをして、心身リラックスができたら良い。社会情勢が悪い中、ストレス社会の癒しの場になる。旅館のロビーでリース体験ができればとも思う。

丘陵地にある水田。今まで畑地に目がいっていたが、農業は水田もあり、現在機械で行っている田植えなどを、長靴をはかずに裸足で田植えをする気持ちよさを味わう。１年を通して春は田植え、夏は草刈り、秋は稲刈りを体験する。

近くの遊休農地を利用する。近くの山林の下草刈りをしてエリアを広げる。乳牛を１～２頭飼育する。田舎の暮らしが健康に暮らす原点になるよう、食べ物、住環境、ライフスタイルを提案する。体験受け入れ同士の連携、情報交換を行う。

日本で行われているグリーン・ツーリズムは、ヨーロッパと全く違う。子どもをだしにした思い出作りのための安近短旅行。そこで逆にあえて、商業主義的な、旅館泊まり＋農家で体験をこの地域のグリーン・ツーリズムとして推進しても良いのでは。それも大人をターゲットにする。

フルーツラインなどでの直売所で体験学習を行っている人たちの連携が必要。トイレの設置。まちから来た人が「ホッ」とできる場を提供する。

農園で行う。スイカ体験を消費者の人とスイカの花を見たり、スイカをとったり、食べたりして、いろいろ交流を図る。また花や畜産、梨などを作っている人と連携して体験学

習をする。野菜や果物をつかって調理をして食べる。体験するにはトイレが欲しい。

〇進め方、体制の提案

農業体験や観光農園に取り組んでいる人との連絡会を開催する。情報交換、ＰＲの企画実施。農協観光とタイアップして丘陵地１泊２日の農業体験ツアーを企画する。

梨の収穫体験、梨狩りは既にやっている。梨の摘果作業の体験。三方でやったような個人名を梨に掘りつける。旅館と協同して体験。受け入れ農家同士の横のつながりの強化（連絡網）。官の力も借りてＰＲする。人数のとりまとめ等も。体験学習の料金を安くすべきか？昔芦原町企画でやったときは料金が安く、たくさんの参加者があった。

それぞれがやっている事の情報をお互いに流す。客の共有、紹介し合う。そのためには自分の周りが行っていること、他の人が行っていることに目を向ける。温泉のお客さんを自分のお客に。温泉の売りにしてもらい、「楽しめる町」にする。食べる、遊ぶ、休む（リラックス）で「満足できるまち」

農家同士の連携。情報交換ができて、助け合いをする。体験者が簡単に体験できる場を探せるようにする。

(3) ワークショップを行ってみて（評価と課題）

初めての試みであったが、様々な視点から多くの意見が出され、検討できたことは住民の意見形成という手段としては１つの成果といえる。いきなり意見を言い合うのではなく、カードに自分に意見を書いてみる、という作業も、自分の考えを整理し確認することができた。

今後の課題は、具体化と継続性、情報公開である。提案された内容を、今後、丘陵地でのグリーン・ツーリズムに展開させていくためには、さらに掘り下げたワークショップが必要である。また、今回に限らず、地域住民の意見形成の場として根付くためには、継続できる仕組みづくりが必要である。理想としては参加者が自発的にＮＰＯ等を立ち上げていくことである。しかしその前段階として、住民の自立を前提として、事務局機能や場の提供は公的機関で担うという体制が必要である。

さらには、このワークショップが地域住民全体の意見に発展するために、ホームページなどを通して情報発信されることが望ましい。

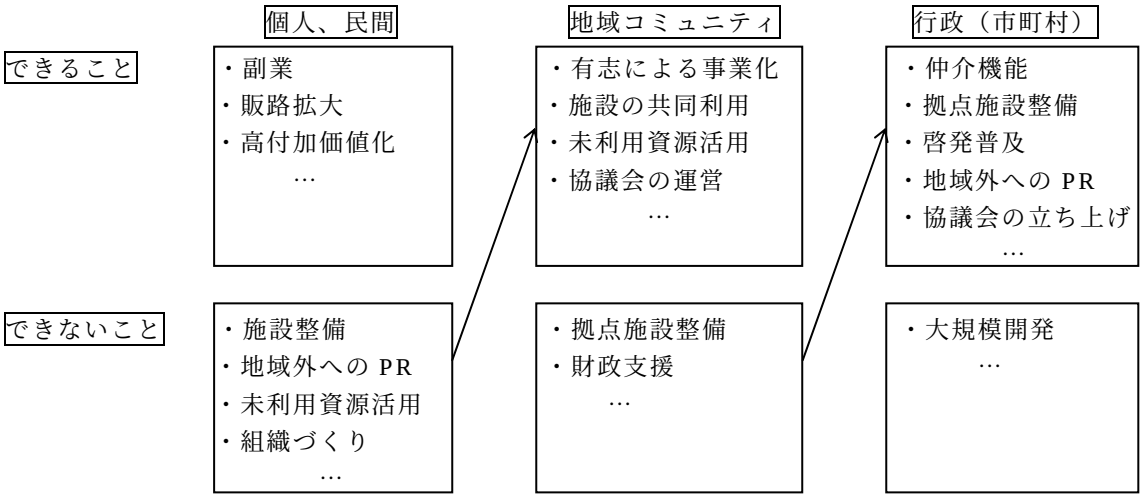
4. 丘陵地におけるグリーン･ツーリズム推進に向けての課題

(1) まちづくりからの視点

グリーン・ツーリズムは農山漁村地域の産業・経済に影響を及ぼすだけでなく、自然環境、景観、伝統、文化等地域社会全体に影響を与えるものであり、また農家、観光関係者、地域住民、行政等の地域内の多様な主体が関わりを持つことから、グリーン・ツーリズムはまちづくりそのものである。

今後のまちづくりは、個人や家庭といった小さな単位でできることはそこに任せ、そこでは実行不可能なことや非効率なことはより大きい単位である地域コミュニティに任せ、地域コミュニティでは実行不可能あるいは非効率なことは市町村等のさらにより大きな単位が順次に補完するという考え方（補完性の原理）が重要である。すなわち、地域住民一人ひとりがまちづくりに参画することが重要であり、また一人では不可能あるいは非効率なことであっても連携、協働することなどで実現可能にするという地域内の創意工夫ある取り組みが今後求められる。

図表 4- 1　グリーン・ツーリズム推進のための各主体の役割



(2) 民間主導によるグリーン･ツーリズム推進のために

１）できるところから民間主導の取り組みを

グリーン・ツーリズムは、行政による施策としての展開を待つことなく、グリーン・ツーリズムに興味、関心を持つ農家、旅館・民宿、レストラン等の民間によって自主的、主体的に取り組むことができる。農家民宿「たかやす」の事例は、きっかけは行政による交流事業にあったかもしれないが、行政支援に頼らなくても自主的に運営することが可能であることを示している。また、２．でみたように、丘陵地においても農業体験、体験民宿

等の取り組みを自主的、主体的に進めている例がすでに少なからず存在する。行政の働きかけがあるまで待つというのではなく、民間主導で積極的にグリーン・ツーリズムに取り組むことは重要である。これらのグリーン・ツーリズムに取り組む目的が自己の利益追求あるいは生き甲斐の創出といった私的な動機であったとしても、地域内において点として存在するこれらの事業がそれぞれ結びつき、地域内で広がりを持つようになり、さらには地域ぐるみの取り組みに発展する可能性があるからである。

２）民間主導のグリーン・ツーリズムに対する行政支援

農家、旅館・民宿、レストラン等の民間事業者は、行政の支援待ちの姿勢でグリーン・ツーリズムに取り組むのではなく、できることから積極的に主体的、自立的に取り組む姿勢が望まれる。そのためには後述するように、行政は学習の場を提供することが必要である。

また、丘陵地におけるグリーン・ツーリズムの推進を図る上で、行政には民間による個々の取り組みの結びつきを作る機会を提供することが役割として考えられる。

さらに、ワークショップを通じて丘陵地において農業体験等の取り組みを実施している農家等から、「トイレがない」、「案内地図がない」等の実施上の諸問題が指摘されている。こうした諸問題に対して官民協力して対応策を検討、協議する場を設置することが求められる。そのため、後述する丘陵地におけるグリーン・ツーリズムの推進を図るための地域ぐるみの協議会等を行政が主導的な役割を果たしながら設置することが望まれる。

⑶ 地域ぐるみのグリーン・ツーリズム推進のために

１）学習の場の提供

グリーン・ツーリズムを地域ぐるみで展開しようとしても、地域住民の間でグリーン・ツーリズムに関する知識、情報量は異なり、グリーン・ツーリズムに対して持つイメージも様々であるため、地域ぐるみの取り組みにはなりにくい。そこでまず、グリーン・ツーリズムとは何かということに関して地域住民間で情報の共有化を図りながら、グリーン・ツーリズムに関する地域住民の理解を深めることが必要不可欠である。特に、地域ぐるみでグリーン・ツーリズムを推進することが地域の活性化をつながることを地域住民に理解してもらうことが求められる。

グリーン・ツーリズムの啓発・普及を図るために、行政には研究会、フォーラム等を開催して地域住民に学習の場を提供することが重要な役割として求められる。こうした学習の機会に啓発されて、グリーン・ツーリズムに対する関心が高まり、中には民間の間で主体的、自立的にグリーン・ツーリズムに取り組むという動きも出てくるかもしれない。

２）人材の発掘と幅広い力の結集

上記の学習の場においてグリーン・ツーリズムに興味・関心を抱く農家、旅館・民宿等が現れ、彼らが自主的、自立的にグリーン・ツーリズムを始めることが期待されるが、同

時に彼らは地域ぐるみのグリーン・ツーリズムの取り組みにおいてその中核的存在となりうる。グリーン・ツーリズムへの理解がまだ不十分であり、誤解や不安があるため、グリーン・ツーリズムに一歩踏み出す上で障害となっている。中核的存在がリーダーシップを発揮し、グリーン・ツーリズムを先導することで、グリーン・ツーリズムに一歩踏み出せずためらいを持っている人たちに自信を与えることができる。

地域ぐるみのグリーン・ツーリズムの推進を図るためには、行政は中核的存在となりうるような人材あるいはグループを発掘することと同時に、彼らあるいはグループ間でつながりができるきっかけをつくり、ネットワークの拡大を図ることが求められる。

異業種間の交流が拡大、深化し、相互の情報、ノウハウ、施設等を共有化することによって、グリーン・ツーリズム活動の相乗効果と波及効果を作り出す。そもそもグリーン・ツーリズムは、農業＋民宿、農業＋レストラン、農業＋流通、農業＋環境保全などのように異業種の連携によって作り出される事業である。地域内の多様な連携、協力関係を構築することによって、地域資源を効率的に活用することができ、グリーン・ツーリズムの可能性を広げることができる。

３）マスメディア、ホームページ等を通じた情報発信

マスメディア、ホームページ等を通じた情報発信は、地域ぐるみのグリーン・ツーリズムの推進に有効である。グリーン・ツーリズム事業は、経済的動機よりもむしろ、自己の生き甲斐や楽しみとして取り組む場合も多い。マスメディア、ホームページ等で取り上げられ注目されることは、地域住民に自信と気づきを与えるきっかけとなる。また、PR 効果も期待されることから、マスメディア、ホームページ等を積極的に活用することも重要である。

４）グリーン・ツーリズム推進の合意形成のための組織づくり

グリーン・ツーリズムを地域ぐるみで展開しようとしても、農家、民宿・旅館、経済団体、地域住民、さらには行政等の相互間でグリーン・ツーリズムに対して期待することは異なるであろうし、また同じ例えば農家同士の間でもグリーン・ツーリズムに対して持つイメージや目的が異なることもある。

地域ぐるみのグリーン・ツーリズムの推進を図るためには、グリーン・ツーリズムの目的を共有化し明確化することが求められる。１．でみたように、グリーン・ツーリズムには多様な形態と目的がある。したがって、地域ぐるみでどのようなグリーン・ツーリズムを展開するのかについて合意形成を図る必要がある。

こうした合意形成を図る場として、グリーン・ツーリズム研究会あるいはグリーン・ツーリズム推進協議会などのグリーン・ツーリズム推進のための組織を立ち上げることが行政の役割として求められる。

研究会あるいは推進協議会には、以下の機能あるいは役割が求められる。

① 情報提供機能

・研修会、フォーラム等の開催（学習の場の提供）

・グリーン・ツーリズム事業者への情報提供

② 調査機能

・先進事例等の調査

・地域内における既存のグリーン・ツーリズム事業の現状把握

・地域資源、地域の魅力の発掘

③ 企画開発機能

・地域ぐるみのグリーン・ツーリズム事業の企画・開発

・グリーン・ツーリズム事業案の実験と評価

④ 組織化機能

・人材の育成、人材の発掘

・地域資源の有効活用を図るための連携、協力等のネットワークの構築

・グリーン・ツーリズムの目的の共有化、明確化

・グリーン・ツーリズム事業に係る各主体の役割と責任の明確化

・ワークショップ等による女性、若者等の各階層の意見、不満等の抽出

⑤ 情報発信機能

・マスメディア、HP 等による PR

⑥ 調整機能

・施設整備

・行政の各種施策との連携

丘陵地におけるこれまでの行政主導型のまちづくりでは、地域住民はまちづくりを行政任せにする傾向があり、また家父長制的家族関係あるいは人間関係等のために女性、若者等の階層が公平な立場でまちづくりに関与することは十分にできなかった。地域ぐるみの、また幅広い階層が参加できるグリーン・ツーリズムの推進を図るために、推進協議会においてワークショップ等を活用することなどによって誰でも自由に意見を言える場を設定することも必要である。また、協議会の運営もできるだけ行政主導とならないように配慮する必要がある。協議会の立ち上げ段階では行政が中心的役割を担うとしても、協議会の運営に関しては、初期の段階から可能な限り地域住民に委ねることが重要である。こうした新しい取り組みを実施する中で、これまでまちづくりとは疎遠であった地域住民のキャパシティ・ビルディング（能力の構築）となることが期待される。

参考資料

【参考資料】「農と文化の体験」参加者アンケート調査の結果

問い1．①年齢

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.10歳代	3 (23.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (11.5)
2.20歳代	1 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.8)
3.30歳代	4 (30.8)	2 (50.0)	5 (55.6)	11 (42.3)
4.40歳代	3 (23.1)	2 (50.0)	3 (33.3)	8 (30.8)
5.50歳代	2 (15.4)	0 (0.0)	1 (11.1)	3 (11.5)
6.60歳以上	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

問い1．②性別

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.男	4 (30.8)	1 (25.0)	2 (22.2)	7 (26.9)
2.女	9 (69.2)	3 (75.0)	7 (77.8)	19 (73.1)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

問い1．③誰と一緒に参加したか（複数回答可）

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.個人	1 (7.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (3.8)
2.父又は母	3 (23.1)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (11.5)
3.妻又は夫	4 (30.8)	0 (0.0)	4 (44.4)	8 (30.8)
4.子ども	4 (30.8)	4 (100.0)	8 (88.9)	16 (61.5)
5.友人・知人	2 (15.4)	0 (0.0)	1 (11.1)	3 (11.5)
6.その他	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

問い1．④住所

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.福井市	6 (50.0)	0 (0.0)	5 (55.6)	11 (45.8)
2.三国町	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (33.3)	3 (12.5)
3.芦原町	2 (16.7)	1 (33.3)	1 (11.1)	4 (16.7)
4.金津町	4 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (16.7)
5.県内	0 (0.0)	2 (66.7)	0 (0.0)	2 (8.3)
6.県外	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	12 (100.0)	3 (100.0)	9 (100.0)	24 (100.0)

問い2．①昨年度の「農と文化」体験コースに参加したか

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.参加した	3 (23.1)	0 (0.0)	1 (11.1)	4 (16.0)
2.参加しなかった	10 (76.9)	3 (100.0)	8 (88.9)	21 (84.0)
合計	13 (100.0)	3 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

問い2．②他の体験交流への参加経験

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.ない	9 (69.2)	2 (50.0)	3 (33.3)	14 (53.8)
2.1回	2 (15.4)	1 (25.0)	2 (22.2)	5 (19.2)
3.2～5回	2 (15.4)	0 (0.0)	4 (44.4)	6 (23.1)
4.6～10回	0 (0.0)	1 (25.0)	0 (0.0)	1 (3.8)
5.10回以上	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

問い2．③②に関して具体的な体験内容と場所（記述回答）

・一年を通して米作り（福井市）
・芋掘り（芦原町）
・芋掘り、栗拾い（芦原町）
・芋掘り、栗拾い（芦原町）
・牛のふれあい体験と乗馬体験
・ソーセージ作り（芦原町）
・そば打ち（越前そば道場）
・そば打ち
・そば打ち（今庄）
・そば打ち（池田町そば道場）
・大根ひき（芦原町）
・大根堀（芦原町）
・バター作り（ラポーゼかわだ）

問い3．①自然･環境

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	8 (61.5)	2 (66.7)	7 (77.8)	17 (68.0)
2.やや満足	2 (15.4)	0 (0.0)	2 (22.2)	4 (16.0)
3.普通	3 (23.1)	1 (33.3)	0 (0.0)	4 (16.0)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	3 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

問い3．②体験内容

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	10 (76.9)	1 (25.0)	9 (100.0)	20 (76.9)
2.やや満足	1 (7.7)	2 (50.0)	0 (0.0)	3 (11.5)
3.普通	2 (15.4)	1 (25.0)	0 (0.0)	3 (11.5)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

問い3．③施設

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	4 (30.8)	1 (25.0)	6 (75.0)	11 (44.0)
2.やや満足	7 (53.8)	2 (50.0)	2 (25.0)	11 (44.0)
3.普通	2 (15.4)	1 (25.0)	0 (0.0)	3 (12.0)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	8 (100.0)	25 (100.0)

問い3．④料理

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	2 (16.7)	2 (50.0)	9 (100.0)	13 (52.0)
2.やや満足	4 (33.3)	2 (50.0)	0 (0.0)	6 (24.0)
3.普通	4 (33.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	4 (16.0)
4.やや不満	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.0)
5.不満	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.0)
合計	12 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

問い3．⑤もてなし･接客

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	7 (58.3)	2 (50.0)	8 (88.9)	17 (68.0)
2.やや満足	1 (8.3)	1 (25.0)	0 (0.0)	2 (8.0)
3.普通	3 (25.0)	1 (25.0)	1 (11.1)	5 (20.0)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (4.0)
合計	12 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

問い3．⑥価格

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	6 (46.2)	0 (0.0)	3 (33.3)	9 (34.6)
2.やや満足	1 (7.7)	3 (75.0)	2 (22.2)	6 (23.1)
3.普通	6 (46.2)	1 (25.0)	4 (44.4)	11 (42.3)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	13 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	26 (100.0)

問い3．⑦全体

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.大変満足	6 (50.0)	1 (25.0)	7 (77.8)	14 (56.0)
2.やや満足	4 (33.3)	2 (50.0)	2 (22.2)	8 (32.0)
3.普通	2 (16.7)	1 (25.0)	0 (0.0)	3 (12.0)
4.やや不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
5.不満	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	12 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

問い4.「農と文化体験」コースへの今後の参加意思

	越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸	動物とのふれあいとリースアレンジ体験	ラーバンの森とパン焼き体験	合　計
1.積極的に参加したい	2 (16.7)	0 (0.0)	1 (11.1)	3 (12.0)
2.機会があれば参加したい	10 (83.3)	4 (100.0)	8 (88.9)	22 (88.0)
3.参加しない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
4.分からない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	12 (100.0)	4 (100.0)	9 (100.0)	25 (100.0)

問い5.「農と文化の体験コース」に参加して、「良かった」と思う点（記述回答）

・つかれた。
・自然の中で農家の方々のご苦労が感じられて食べ物を粗末にしてはいけないと思いました。
・とても誠意あるスタッフの方々によって楽しく過ごさせていただきました。説明がとてもよかった。ゆったりしたペースも。
・小人数だったため講師の方の話が良く聞けた。
・こういう催しへの参加は久しぶりだったので、とても楽しかった。渋柿がこんなに簡単に甘くなるのにはびっくりです。
・あわせ柿作りは、非常にためになった。近くにいながら、金津創作の森に来た時がなかったので、この機会があり良かった。
・柿の渋抜きの方法も分かりましたし、陶芸も好きなので。
・日頃と違った時間を過ごせて、リフレッシュになった。・
・日頃、経験できないことができること。身近な、こんなよい自然があるのに普段は無関心なのでなるべく多く接したい。
・陶芸がとても楽しくやって良かったと思いました。
・子供に肉牛の現場を見せられてよかった。
・個人では訪ねる機会を持てない場所にも行ける。
・子供たちに普段できない体験をさせてもらえた。
・活動がゆったりと進んでいき時間におわれることなく体験できてよかったです。内容がもりだくさんで子供たちも楽しんでいました。
・普段農業と接する機会がないので、楽しかった。
・自然にふれあえること。
・自然と触れ合うことができ、とてもリフレッシュできました。
・まき割りは家ではできないのでおもしろかったと思う。
・農作物や自然を体で体験できる時間や思い出を家族と一緒に作れて非常にうれしい。
・普段経験できないことを子供たちに体験させることができたこと。
・芋掘り、パン作り体験→それを食べたこと、おいしかった。
・子供たちが普段体験できない自然にふれあえたこと。

問い6.「農と文化の体験コース」に参加して、改善して欲しいと思う点、及び欲しいと思う体験コースの内容（記述回答）

＜改善して欲しい点＞

・待ち時間が長い。

・最初に 1 日の詳細なスケジュールを紙ベースであるとよい。

＜欲しい体験コース＞

・かきの収穫コース

・スイカ食べ放題

・サイクリングコースで。

・ダッシュ村(TV)にあるわらぞうり作りや豆腐作りなど。

・またハーブ入りソーセージ作り等をしていただきたいです。

・季節ものを使った料理講習会

・次はガラス細工も良いと思う。

・雪あそび！三国の子だけど雪で上手に遊べないので。

・子供たちがカブト虫や生き物が好きなので、実際にこの目で見られたら喜ぶだろうなと思いました。芋掘り、栗拾いなどももう少し思い切りできる機会もあれば子供たちも喜ぶと思います。

【参考資料】「農と文化の体験コース」小学生以下の参加者の感想文

1. 越前柿収穫体験と「創作の森」で陶芸

私は、農と文化の体験コースに参加して、とてもいい思い出になりました。
まず、柿の畑に行ったとき、柿の甘い匂いがしてとてもいい気持ちでした。この柿畑を管理している人の説明や資料をよんでいると柿をさいばいするにも大変な努力をしているんだなぁと、思いました。
次に、とう芸をやったときに、学校の行事で 1 回やったけど、やっぱり何度やってもとう芸は難しかったです。妹は泣きだしたけど自分ではいい作品ができたなぁと、思いました。来年は、ガラスで何かを作りたいです。

わたしは、今かきもぎに行きました。かんたんにきれいにきれたのでとても楽しかったです。かきのとりかたをおしえてくれた人は、とてもわかりやすくおしえてくれたのでよかったです。お母さんとおねえちゃんとかきをいっしょにとって高いほうじゃなくてひくいほうのほうがいいときいてとろうとしたときに下に赤色のミニトマトのような物がおちていて、さわってみたらすぐにぶちっとなってしまっておもしろかったです。
そして、車にのって創作の森へお皿を作りに行きました。むずかしかったです。ぜんぜんできなかったときうしろのプロのおさらを作る人がいて、見ていたらすごい手さきで左右に手をうごかしていました。わたしも、プロのようにはやわざでうまく作れたらいいとおもいました。すごくてとても楽しかったです。

とうげいをしている時間は、あっというまにすぎていき、もう 3 時かとびっくりしました。
とうげいは、今日で４回目です。家や、ようち園でやりました。はっ葉でお皿を作ったり、ゆのみをつくったりしました。
今日は、なが細いお皿を目ざしてやったらカラフトマスのいい皿ができました。
今日は、いい作品が作れてよかったです。また、いつかここに来て、お皿や、ゆのみを作ってみたいと思います。

今日は、ほんの少しおもしろかった。
あまくもないししぶくもなかった。
けっこうよかった。
びみょうだった。
腹がへってたからうまかった。
たねがなくてよかった。
たべやすかった。
つかれた！
たべにくかった。

さいしょはこつがつかめなったけどあとになってこつがとれるようになって、さくひんがつくれるようになってうれしかったよ。まえのようちえんのとき、うまくこつがとれなくてあながあいたけどこんかいはうまくできてうれしかたよ。

2. 動物のふれあいとリースアレンジ体験

牛をなでたり、牛にえさをやったりして、今までしたことのない体験ができたのでたのしかったです。牛もたくさんえさを食べてくれたのでうれしかったです。またたべてみたいと思いました。リース作りは、いろんな花やかざりがあったのでびっくりしました。きれいな花をつるにたくさんつけたり､かざりを上の部分につけたりしてたのしかったです。いろんな花があってどれにしようかまよったけど、いいクリスマスリースができてうれしかったです。
今日は１日、とてもたのしくておもしろくていい体験をさせてもらってとても心にのこりました。とてもいい思い出になりました。

わたしは今日リースづくりでたくさんの植物があるのをみてとてもびっくりしました。わたのついている実、そしてかわいい花、どれもきれいでした。リースを作りはじめてからどのくみあわせにしようかとてもまよったけど作っていくうちに花と実のくみあわせがわかってきて、できた作品をみたら、自分なりにきれいにできたと思いました。
今日リース作りをしてとても楽しかったので、またこういう機会があったらリースを作りたいな～と思いました。でも次やるときはわらをあんで作ったリースにもちょうせんしたな～と思いました。

リース作りがおもしろくなかったです。
牛がなめてきてびっくりしました。

今日、団地センターに集まってからサンビーフさいとうでさいとうさんの話を聞いてから牛を見せてもらいました。
はじめにさいとうさんが牛をつかまえてその牛をさわらせてもらいました。はじめはこわかったけどしばらくしたらだんだんなれてきました。とてもきもちよかったです。
次に、牛にほし草を食べさせました。とても楽しかったです。
白と黒の牛もみせてもらいました。茶色の牛や顔が白い牛もいたのでおどろきました。顔が白い牛はまつげも白かったです。
牛をみせてもらってから牛若丸というお店でごはんを食べました。おいしかったです。食べ終わってからリースを作りました。２階に行ったらいろんな花があっておどろきました。
花をもっていってリースを作りました。たにかわさんやはせがわさんがいろいろてつだってくれました。思ったよりうまくできてたのしかったしあそべたしリースつくれたしいっぱいあそべた。ちょーたのしかった。おともだちといっしょにあそべたのしかった。お

ねちゃんといとことあそべたしちょーちょーたのしかった。またきたいな。うしもさわれた。ちょーちょーおおきかったよ。こうしもみたよ。ちょーちょーおおきのもいたよ。ごはんをちょーおおきいのにあげたしちょーちょーおおきいのもごはんあげたよ。リースきでつくるやつもわらでもつくったよ。かわいくつくれたよ。わらのほうがリースちょーかわいくできたよ。きょうは、いい日だしたのしい日おもいでの日。きょうは、とってもたのしかったよ。リースつくるときざいりょうをにかいにみにいったらおはながいっぱいあったよ。ねこもいたよ。リースつくっておわったとき、ねこといしょにあそぼうかなとおもったけど、ねこがいなかったからいっしょにあそばなかったよ。

うれしかったです。

ブルーベリーのじゃむもかいました。とてもおいしそでした。

今日はとてもたのしかったです。また来年もあるといいです。

3．ラーバンの森とパン焼き体験

今日、はじめ来たとき、いもほりをして、最初はどこにあるか分からなかったけど、見つかってからどんどんでてきました。でぶやちびなどいろいろありました。

パン作りは、とても楽しかったです。ねこのたまがとてもLOVEリィーでした。

今日は楽しかったです。

さつまいもほりがとてもつかれて汚れたけど楽しかったです。パンをつくったりしてとても楽しかったです。タマがかわいかったです。

今日、ラーバンの森に来て、とても楽しかったです。いもほりは、さいしょほとんどとれなかったけど、あとからいっぱいほれました。ねこの「たま」もかわいかったです。とたけけ（あだ名）のギターはうまかったです。

パン作りは、楽しかったです。とても楽しかったです。

私は、ラーバンの森でパン焼き体験をしたり、たまねぎをわったりなど、いろいろなことをほかにもしました。パン焼き体験は、パンがとてもやわらくて、とてもきもちがよかったです。おいしくなるようにいっしょけん命つくりました。食べてみたらとてもおいしかったです。今日は、本当に楽しかったです。

にわとりにはくさいをあげたことです。つぎはまきわりをうまくやりたいです。

今日、ぼくはいろんなことをしました。いもほりやなめことり、にわとりのえさやりやパン作りです。ほかにもおいもを食べました。いろんなぐがはいっておいしかったシチュー、あんパンや竹の上で作った目玉焼き、どれもとてもおいしかったです。またこれたときはもっとうまくしたいです。

　きょうは、らーばんのもりにいってパンづくりをしました。そとでじゃがいもをきったのがたのしかったです。

[参考資料]　「農と文化の体験コース」参加者アンケート

「農と文化の体験コース」にご参加いただきありがとうごとうございます。今後の参考とさせていただくために、下記の質問にお答えくださいますようお願い申し上げます。

問い１．あなた自身のことについて教えてください。該当する番号に〇印を付けてください。

①年齢　1.10 歳代　2.20 歳代　3.30 歳代　4.40 歳代　5.50 歳代　6.60 歳以上

②性別　1.男　2.女

③誰と参加しましたか（該当する番号すべてに〇印を付けてください）。

1.個人　2.父又は母　3.妻又は夫　4.子ども　5.友人・知人　6.その他

④住所　1.福井市　2.三国町　3.芦原町　4.金津町　5.1-4 以外の福井県内　6.県外

問い２．①昨年実施した「農と文化の体験コース」には参加しましたか。

1.参加した　2.参加しなかった

②「農と文化の体験コース」以外に、田植え、稲刈り、芋掘り、そば打ち、伝統工芸などの農業や文化を体験する余暇活動（日帰り、宿泊どちらでも可）に参加した経験はありますか。

1.ない　2.1 回　3.2～5 回　4.6～10 回　5.10 回以上

③　具体的な体験内容と場所を１つ下記にご記入ください。

体験内容［　　］　場所［　　］

問い３．今回、「農と文化の体験コース」に参加しての感想をそれぞれの項目について該当する番号に〇印を付けてください。

①自然・環境	1.大変満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
②体験内容	1.大変満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
③施設（宿泊施設、体験施設、レストラン・食堂など）	1.大変満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
④料理	1.大変満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
⑤もてなし・接客	1.大変満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
⑥価格	1.大変満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満
⑦全体	1.大変満足	2.やや満足	3.普通	4.やや不満	5.不満

問い４．「農と文化の体験コース」に今後も参加したいと思いますか。

1.積極的に参加したい　2.機会があれば参加したい　3.参加しない　4.分からない

問い５．「農と文化の体験コース」に参加して、「良かった」と思う点を自由にご記入ください。

［　　］

問い６．「農と文化の体験コース」に参加して、改善して欲しいと思う点を自由にご記入ください。また、こんな体験コースが欲しいというご意見がありましたらご記入ください。

［　　］

ご参加いただいたコース名［　　］

ご協力ありがとうございました。